

魔法少女まどか☆マギカ
カ [別編] ～再臨の物
語～（第3部）

マンボウ次郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

橙（だいたい）の花は空に上り、紅い果実は熟れて雨露に濡れた。

「アイツは、本物の魔法少女だったんだ……」

巴マミの死は紛うことなき事実だった。誰よりも強く、誰よりも優しい魔法少女は自らの信念を貫き、螺良くるみと共に円環の理によって消滅した。

これは、最後のグリーンフィードを求めて、再臨の刻を願って、暁美ほむらが描く終局の物語。

（第2部からの続きです）

世界観・キャラクター・設定などは原作を踏襲し、若干のオリジナル要素を含みなが

ら物語は展開していききます。

キャラ崩壊、エロ、百合はありません。

あくまで原作準拠で、できる限り世界観を崩さないよう、円環の理以降の平行世界を
ダークファンタジーとして描いています。

第1部はオリジナルサイト【アニメに！】でご覧いただけます。

a n i m o n i . m a n b o u . c o m /

目次

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部1話） 1

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部2話） 8

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部3話） 15

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部4話） 23

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部5話） 32

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部6話） 41

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部7話） 49

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部8話） 57

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部9話） 65

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部10話） 72

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部11話） 79

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

物語〜（第3部12話） 87

魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の

| | | | |
|-------------|--------|-----|--------------------|
| 物語〜（第3部13話） | — | 95 | 魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の |
| 魔法少女まどか☆マギカ | 別編〜再臨の | 103 | 物語〜（第3部20話） |
| 物語〜（第3部14話） | — | 103 | 魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の |
| 魔法少女まどか☆マギカ | 別編〜再臨の | 111 | 物語〜（第3部21話） |
| 物語〜（第3部15話） | — | 111 | 魔法少女まどか☆マギカ 別編〜再臨の |
| 魔法少女まどか☆マギカ | 別編〜再臨の | 120 | 物語〜（最終話） |
| 物語〜（第3部16話） | — | 120 | — |
| 魔法少女まどか☆マギカ | 別編〜再臨の | 128 | — |
| 物語〜（第3部17話） | — | 128 | — |
| 魔法少女まどか☆マギカ | 別編〜再臨の | 136 | — |
| 物語〜（第3部18話） | — | 136 | — |
| 魔法少女まどか☆マギカ | 別編〜再臨の | 145 | — |
| 物語〜（第3部19話） | — | 145 | — |

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部 1話）

橙（だいたい）の花は空に上り、紅い果実は熟れて雨露に濡れた。

「アイツは、本物の魔法少女だったんだ……」

バマミの死は紛うことなき事実だった。

誰よりも強く、誰よりも優しい魔法少女は自らの信念を貫き、螺良くるみと共に円環の理によって消滅した。

くるみの魂は救われたが、残された魔法少女たちには深い悲しみをもたらした。

魔法少女の運命はいつも過酷だった。希望を輝かせた少女たちに幸せな結末はないのかもしれない。

しかし、悲しんでばかりはいられなかった。

「まだ終わっていないわ」

暁美ほむらが見据えているのは、もうひとつの螺旋の宝珠。

螺良（つづら）あかねの持つソウルジェムは、すべての絶望を忘れたまま見滝原を彷徨っているはずだった。

「ああ、わかってる。まだ終わっちゃいないんだ」

佐倉杏子は頬に流れる涙の音をかき消すように立ち上がると、花型の髪留めを握りしめた。

ほむらもそれがママの遺したものだとすぐに気付いた。

「それはあなたが持つていなさい。バママもきつと喜ぶわ」

「アンタにそんな感情があるなんて思わなかったよ。いや、悪い意味じゃないんだ。ありがとな」

杏子は髪留めを自分の後ろ髪に当てポニーテールを結び直した。

ため息の色は橙に染まり、今ここにある現在地を確かめる。

ほむらの部屋には、杏子、ほむら、天生目ゆう子と、そしてキュウベえがいる。

杏子の傷はほとんど癒えているが、ソウルジェムはすでに限界に近く、もう魔法少女になることすらできない状態だった。

ほむらは外傷は無いが、魔力による自己の肉体修復をしていないので満足に動ける状態ではない。

唯一無事なのはゆう子だけだった。

「あたしとゆう子で、あの白いヤツを探してみる。あたしはもう魔力を使えないからな、みんなの目になるよ。ほむら、アンタは最後の切り札だ」

ほむらが放つ魔法の矢、螺旋あかねに対抗できるとしたら、あの光の矢しかない。

イチジクの魔獣を一瞬で消し去った魔力が、杏子たちに残された最後の魔法だった。

「ゆう子、手伝ってくれるか？」

「うん、巴さんの仇を討つんだよね」

ゆう子は目を真つ赤に腫らしていた。

「はは、そうだな。ママの仇討ちだ。あたしたちの生命の保証はないけど、それでもいいかい？」

「杏子ちゃん、私も覚悟はできてるよ」

「上等」

杏子の八重歯が笑った。

生命を危険に晒すことになるが、ゆう子の覚悟は揺るがない。

運命を共にするソウルジェムの絆で、それ以上の言葉は必要なかった。

「キユウベえはここにいてくれよな。お前がいないとテレパシーが届かないんだから」

「この絶望的状况でそこまで冷静でいられるとはね。杏子、君の成長は大したものだよ」

「ママを超える魔法少女になれるとしたら、やはり君以外にはあり得ないだろうね」

「こんな時にお世辞なんかいらんよ。あたしはママを超える気なんてないんだから」

「マミは遙か彼方、手の届かない存在だよ、と杏子は言った。

「魔法は経験と修練で伸びる部分もあるけど、持つて生まれたセンスと背負った因果による力は超えられない壁なんだよ。そして固有の能力もまた同じだ。杏子、君は現存する魔法少女の中でもずば抜けたセンスを持っている。マミもそれに気付いていたよただどね」

「今となつてはいつでもいいことさ」

「マミも認めた才能の持ち主である杏子も、グリーンフィードが手に入らない今は、魔力の使えない手負いの獅子。

杏子は左手の指輪を眺め、そう呟いた。

「それともうひとつ、天生目ゆう子」

「え……私？」

「君はまだ自分の力に目覚めていないようだ。魔法少女の才能という意味では平凡なレベルだけど、君は何か特別な力を秘めているんじゃないのかい？」

これまでゆう子が見せてきた固有魔法は、まばたきによる瞬間移動。

あのイチジクの使い魔がさんざん杏子たちを苦しめた能力を、グリーンフィードと共に受け継いでいた。

「思い出してごらん、君が叶えた希望の祈りを」

「私が叶えたのは、杏子ちゃんとお友達でいたいっていう願い……」

「魔法少女たちは普通、願いを元にした能力を身に付けるものなんだ。杏子の幻惑魔法、ほむらの時間操作、マミの命を繋ぐリボン、でも君はその能力をまだ見せていないね」

「え？」

驚いたように声を出したのは杏子だった。

「どういうことだよ。ゆう子には別の能力があるってことなのか？」

「いつの時代にも異才な魔法少女はいるものなんだ。あの螺旋くろみだって、普通ではあり得ない異質な能力を持っていただろう？ 無限の穢れなんて、僕らの記憶にはない存在だからね。そういう意味ではゆう子、君の成り立ちは最初からイレギュラーだ」

グリーフシードの転生から生まれた魔法少女は、過去に前例のない極めつけのイレギュラー。

本来は魔女に成るべきグリーフシードを無理矢理ソウルジエムに逆行させ、願いと共に魂の宝珠を輝かせたゆう子は、普通の魔法少女ではない。

つまり

「君の瞬間移動能力はグリーフシードから受け継いだ、いわば裏側の力。使い魔程度が操る凡庸な魔法なんだよ。ということ、表の力……ソウルジエムを輝かせた君の祈りに適った能力が、他にあるはずなんだ」

ゆう子にはもうひとつ、本当の力がまだ眠っている。

「私に何か、別の力がある?」

「そうでないと、君の祈りと能力につじつまが合わないからね。それがどんな能力なのかはわからないけど、もしかしたらこの絶望的状况をひっくり返せるくらいの力を秘めているかもしれない」

逆に言えば、何か特別な力がない限り、今この状況を変えることはできない。

杏子ですらまったく歯が立たなかった相手を止めることができるとしたら、マミのように己の生命を犠牲にしての相打ちがせいぜいだ。

しかし、ほむらも杏子も同じ魔法は使えない。

「もっとも、魔法少女が持つ固有の力はひとりにひとつ。普通は多重能力なんてあり得ないんだけどね。可能性の話をするならば、そのソウルジェムは君だけの意思で生まれたものではないということだよ」

グリーンフィードの転生を経て希望の光を宿した魂の宝珠、ゆう子の左耳にあるイヤリング型をしたソウルジェムが静かに輝いた。

あのソウルジェムはほむらが手に入れ、ゆう子に託した物。

「天生目（あまのめ）涼子の力も受け継いでいるかもしれないわね」

ほむらが静かにその名前を口にすると

「ほむらー！」

杏子が慌てて制止した。

ゆう子の失われた記憶。

円環の理によって消滅した、ゆう子の実姉である天生目涼子の存在はこれまでずっと伏せてきた。

「これ以上黙っていては仕方のない話よ。いつかは知らなければならぬ現実。あなたの氣遣いはわかるけど、今はそれどころではないでしょう？」

「天生目……涼子？」

記憶の片隅に眠る懐かしい響き。

触れられない雲のように、目に見えない風のように、ゆう子の頭の中に泡沫の記憶が交錯する。

ほむらは躊躇わずに言葉を続けた。

「覚えていないのも無理はないわ。消滅した魔法少女の記憶は、普通の人間には残らないのよ。これはあなたが魔法少女になる前の話、天生目涼子はあなたの……お姉さんよ」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く (第3部

2話)

「天生目涼子はあなたのお姉さんよ」

「え!？」

うつすらと聞き覚えのある名前を耳にし、その記憶の糸を手繰る前に告げられた真実。

肉親の存在を忘れる者はいない。

その名前を聞いて想いを巡らせない者はいない。

しかしゆう子の記憶に眠る実姉の名は朧にかすみ、暗闇の中の影のように、その存在は浮かび上がることがなかった。

ただ微かに、温かい誰かが胸の中にいるような、そんな気がした。

「あなたにはお姉さんがいたのよ。それも、つい最近までね。歳は2つ3つくらい上かしら。そして彼女は魔法少女だった」

ほむらが看取った海辺の少女。

グリーンシードの手に入らない世界になっても魔法の力を人助けに使い、自らの魔力

を使い果たして円環の理に導かれた魔法少女。

「あなたの持つソウルジェムは、天生目涼子の遺したグリーンフシードよ。つまりそれは、お姉さんの形見というわけ」

「天生目、涼子……私のお姉さんが、魔法少女……だった」

視線を手元に落とし、ゆっくりと呟いた。

それから左耳にあるイヤリング型のソウルジェムを優しく撫でる。

「どんな、女性（ひと）だったんですか」

「とても強くて、優しい人ね。最期にあなたの名前を口にしていたわ。だからあなたを見つけてソウルジェムを託すことができたのだけけど」

自分では憶えていない肉親についての記憶を、他人から聞かされるのは不思議な感覚かもしれない。

それはとても切なく、残酷な運命の螺旋だった。

ほむらの回想の一部始終を聞いたゆう子はしばらく黙ってから

「立派な魔法少女、だったんですね。なんか、変な感じですよ。私の知らないお姉さんがいて、その人は魔法少女で、私がソウルジェムをもらっている……」

ひとり言のように自分に言い聞かせた。

「ありがとう……ございます、教えてもらえて良かったです。自分の中にあるもうひとりの

感覚がわかったような気がします」

「もうひとりの感覚？ お姉さんの意識が残っているの？」

「はい、そうだと思います。一度だけ、私が私でなくなるような感覚があつたんです。ブリキの兵隊人形と戦っている時に、自分の感覚が薄れていくような、そんな感じがしたことがあつて。あれはきつとお姉さんの意識だったのかもしれない」

ゆう子の持つソウルジュエムに、もうひとつの意識が宿る。

すでに円環の理によつて救済され、この世に存在しないはずの天生目涼子の魂が、僅かに意思を留めているのか。

いずれにしても、普通ではあり得ないことだとキュウベえは言うが、それはゆう子本人にしか感じることでできない現実だった。

「私のお姉さんの意思が、何を残してくれたのか……自分で探してみたいと思います。もし見つけることができれば……お、お姉さんのことを、思い出すかも……しれませぬよね」

「……そうね」

強がる声も掠れながら気丈に振る舞うゆう子を見て、ほむらはただひと言だけ頷いた。

「ほむらさん、ありがとう。姉の分もお礼を言わせてくださいね。杏子ちゃん、行こう！」

杏子ちゃんがみんなの目になるなら、私は杏子ちゃんの翼になるよ」

「はあ？ そりやどういう意味だよ」

ゆう子はすぐに立ち上がると杏子の左手を握り、目を閉じた。

「ちよっ……」

そのまま、何か言いかけた杏子の言葉を残してふたりはほむらの部屋から姿を消した。

瞬間移動でどこかへ転送されたふたりを見送ると、キュウベえは

「答えは自分で見つけるつもりだね。天生目ゆう子はグリーンフシードの転生から生まれた魔法少女の複合種、いわばハイブリッドだ。普通の魔法少女と違って、ふたり分の因果を背負っていることになる。未だ目覚めていない表の力は、僕らの想像を超える異質な能力の可能性があるね」

と、ほむらを見て言った。そして

「起死回生の能力とはいかなくても、もしかしたらこの状況を変える何かが起こるんじゃないかな」

とも言った。

「そうでなければ何も始まらないわ」

ほむらの返事は、どこか含みのある言い方だった。

「なるほどな。翼になる、ね」

瞬間移動でほむらの部屋を出たふたりは、夕暮れの中を歩き出した。

「その移動能力は、意外と使えるかもしれないな」

杏子は頭の後ろで手を組みながら、紅く染まる空を眺めながら言った。

「でも、あんまり魔力を使いすぎるんじゃないぞ？ お前はまだ半人前の魔法少女なんだし、あたしみたいに魔法が使えなくなっちゃったら……って」

横目でゆう子を見ると、その瞳には今にもこぼれ落ちそうな涙の雫でいっぱいだった。

杏子は驚いて立ち止まり、わけを尋ねた。

「ごめんね、杏子ちゃん。私にお姉さんがいたなんて、ぜんぜん知らなかった。私、忘れちゃってるの？ 名前を聞いても顔も思い出せないし、お父さんやお母さんも何も言っていない。みんな忘れちゃってるの？」

「……ああ。ゆう子のお姉さんは、魔法少女として消滅しちまったんだ。だから人間の記憶には残らない。姿を憶えているのは、最期に居合わせたほむらだけってことになるかな」

「生まれた時から一緒に過ごしてきた家族を忘れちゃうなんて、信じられなくて……」

そうでなければ、人ひとりが突然消えてしまった事実は世の中で説明がつかない。

記憶の改変が起こるのは魔法の摂理であり、この不条理も魔法少女の悲しい運命（さだめ）と言える。

「でもさ、お姉さんは死んじまったわけじゃないんだぜ。円環の理に導かれて、憎しみも悲しみもない世界からゆう子のことを見守っているんじゃないかな。それに……」

杏子はひと呼吸置いて

「ソウルジェムの中には、お姉さんの意思が残っているんだろ？」

「……うん」

「家族つてのは、いつもどこかで心が繋がってるんだ。あたしも両親と妹を亡くしちまったけど、今でも心の中で生きてる気がするよ。それに、ママだつてな」

杏子の言葉は、常に実直で真つすぐだった。

「そのソウルジェムが、お姉さんが生きていた証さ。天生目涼子が自分の住んでいた街を守り通していたように、天生目ゆう子もまた、守りたいものを最後まで守り通せばいい」

「……ありがとう、杏子ちゃん」

人は悲しみを忘れて生きることができないが、それを乗り越えて前へ進むことはできる。

ふたりは陽の落ちた見滝原の街を、並んで歩き出した。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

3話）

3年前。

マミや杏子が魔法少女になる前の六千石町に、キュウベえはいた。

大きな工業地帯を抜けた先にある病院の屋上。

仲の良さそうな姉妹が会話をしているのを眺めていた。

「お姉ちゃんは来年からひとり暮らしなんですよ？」

「ひとり暮らしじゃなくて、寮生活かな。だからこうして会いに来るのも難しくなっちゃうんだ」

姉と呼ばれる少女は、車椅子に乗る妹を後ろから支えて話をしていた。

「どうした？ 寂しいのか？」

「そんなわけないでしょ、私 もうすぐ6年生だよ？ お姉ちゃんがいなくても平気だもん。勉強しろってうるさく言われなくて済むし」

「あ、こいつ〜」

生まれつき足が悪く入院を繰り返してきた妹と、高校進学を機に県外で寮生活を始

める姉。

妹想いの姉は、入院中にはよくこうして見舞いに来ていた。

学校を休みがちな妹の勉強を見てやったり、話し相手になつたり、共働きの両親に変わつて妹の面倒をよく見る、健気な姉だった。

「ねえ、もし足が治つたら何がしたい？」

「え？ 急にどうしたの？」

「いや、今は歩くことも大変かもしれないけど、自由になつたら何がしたいかなつて」

妹の不自由な足は治る見込みのない病だと、姉は知っていた。

先天性の疾患で原因がわかっていないうえに、現代の医学ではどうしようもないものだった。

「うくん、そうだなあ……思いつきり走つてみたいかな。自分で走るつて気持ちいいんだろうね」

「お、いいね。そしたら私と競争しようか」

「あはは、お姉ちゃんには勝てないよ。お姉ちゃんは陸上の選手だもん。だから遠い学校に通うことになつたんでしょ？」

「何事も諦めたらそれまでだ。努力すれば空だつて飛べるさ」

「空は飛べないよー」

ふたりの明るいい笑いが屋上に響いていた。

「そろそろ冷えてきたから、中に入ろうか」

「……もう、帰っちゃうの?」

「また明日、来るから」

そう言つて車椅子と一緒に病棟に入つて行く少女たちを眺めていたキュウベえは、姉の姿に魔法少女の素質を見ていた。

あの姉は、強い願望を持っている。

それはキュウベえだけに見える人間の少女のエネルギー源で、叶わぬ願いを秘めているからこそ魔法少女の素質となるものだった。

姉の中に見えた強い願いの光は、魔法少女たるに十分な熱源だった。

キュウベえは、陽も暮れた住宅街を歩く姉の前に現れた。

病院帰りの姉は立ち止まり、奇妙な物を見るような目でキュウベえを見つめた。

猫のような兎のような、小さな生き物。

紅くて丸い眼、長い耳、大きな尻尾、見たこともない小動物が、少女と向き合っていた。

「やあ、僕が見えるかい?」

「……へえ、喋れるんだ」

姉は驚くこともなく、落ち着いた様子でキュウベえを見下ろした。

西の空に陽が落ち、薄暗い舗道に街灯が灯っている。

平日の帰宅時間ということもあって、姉の他にも家路を急ぐスーツ姿の男性や学生らしき女性が歩いているが、誰もその生き物に気付いていないようだった。

「やっぱり君には素質があるようだね。実は、僕はお願いがあってここに来たんだ」

愛くるしい姿で話しかけるキュウベえに、警戒心を抱かずに耳を傾ける少女。

というよりも、自分の前にこの奇妙な生き物が現れたのを、その日が来るのを待つていたような目で見つめていた。

「いいよ。その代わり、私のお願ひも聞いてもらえるかな」

一体、何を察しているのか、少女はすんなりと話を運んだ。

「もちろん、そのつもりだよ」

「で、あなたのお願ひっていうのは私に何かしろって言うんですしよ？ 生命を預けると

か、そういうのかな」

「驚いたなあ、君と会うのは初めてのはずだけど、どうしてそこまで話がわかるんだい

？」

「さあ、どうしてだろうね。私もあなたに会うのは初めてだけど、いつかこんな日が来るんじゃないかと思ってたんだ」

勘か、予見か、願望か……

普通ではあり得ないこの状況を、まるで必然のように受け入れた。

「なるほど。君には、どうしても叶えたい願いがあみたいだね。それなら都合がいい。それじゃ、僕は君の願いを何でもひとつ叶えてあげる。それと引き換えに、魔法少女になつて欲しいんだ」

「魔法……少女？」

「そう。君の魂をソウルジェムに変えて、奇跡と魔法を司る魔法少女になるんだ。そして魔法少女になる子には、魔女と戦う使命が課せられる。君にはその運命を背負う覚悟があるかい？」

「私の願いは必ず叶うの？」

「もちろんだよ。お金でも地位でも名誉でも、どんな願いもひとつだけ叶えてあげる。君の願いが叶うことで、僕との契約が結ばれるんだ。どちらも決して反故にはならないから安心して」

少女の名前は天生目涼子。

六千石町の尾島中学に通う3年生で、成績優秀・スポーツ万能な優等生。

県内でも有数の陸上選手だった涼子は、来春からスポーツの特待生として県外の有名学校に通うことが決まっていた。

そして、何ひとつ不自由の無きそんなこの少女が告げた願いは

「妹の、ゆう子の足を治して欲しい」

というものだった。

難病を抱え、学校に行くこともままならない妹。

自分の足で歩くこともできず、入院と通院を繰り返してきた不憫な妹。

病室には涼子の走る姿を写した写真を飾り、いつもその活躍を応援していた。

「あの子の足は、どうやっても治らないんだ。病院の先生は根気よく治療とりハビリを続けていきましようって言うてるけど、そんなの気休めにもならないのはわかってる。だから、あの子の足を治してくれるんだったら、私は何でもするよ。できるかい？」

「どんな奇跡でも起こしてあげるのが僕の役目だからね。自分の為の願いじゃなくても構わないさ。その願いが、君にとって一番叶えたい願いなんだね？」

「ああ」

「いいだろう、契約は成立だ」

こうして少女は、希望の祈りによってソウルジェムを輝かせ魔法少女になった。

もともと運動能力がずば抜けていた涼子は、中学生離れした運動神経で目にも止まらぬ素早い動き、高い移動能力を身に付けていた。

また彼女は、魔法少女としては珍しく武器を持たなかった。

戦いの際には、卓越した魔力のコントロールで魔女の身体に癒しの魔法を当て、その穢れた肉体を浄化させた。

相手を傷付けず、自らの掌から魔力の波動を伝えて魔女の呪いや絶望を断ち切る。

負の感情で形成された魔女に癒しの魔法が反作用し、肉体を消滅させるといふ少し変わった戦い方をしていた。

それを見たキュウベえは

「君は、どうも普通の魔法少女とは違うようだね」

と言った。

「そうなのかい？」

「そんな戦い方をする魔法少女は、僕が見てきた中にはいないよ。魔女は呪いや絶望が具現化した姿、つまりは肉体を持つ存在だから、物理的に傷付けることでグリーフシードと肉体の結合を途切れさせるんだ。癒しの魔法の反作用で魔女を消滅させるなんていう発想は、僕も考えもしなかったよ」

「へえ……。でも魔法はさ、相手を傷付けるだけのものではないと思うんだ」

「どうあれ、魔女に勝つことが君の使命だ。その過程で何を考え、どう戦うかは君の自由だからね。僕がとやかく言う必要はないんだ。ただ、その魔力の使い方は特筆すべき存在だよ」

「ふうん」

キュウベえは、涼子の魔法を異端視するようでもあつたが「いつの時代にも、魔法の寵児は生まれるものだね」

魔法少女の才能という意味では大きく認めるほどだった。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

4話）

その後キュウベえは隣の見滝原市へと渡り、そこでマミと出会う。

春になり、天生目涼子は尾島中学を卒業、六千石町を離れ県外の南の街へと越していった。

キュウベえをして「魔法の寵児」と称された涼子は、新しい街でも魔女退治を続けていた。

学校や陸上など、忙しい合間を縫っては精力的に魔女探索を行ない、卓越した魔力のコントロールで魔女を滅し、グリーンフシードで自らの穢れを浄化する。

涼子は自分の運命を素直に受け入れていた。

——妹の、ゆう子の足を治して欲しい。

涼子の願いで、生まれつき足が悪く、歩くこともままならなかった妹の足はすっかり治り、中学に進学して陸上部に所属したらしい。

現代の医学ではどうしようもなかった難病は、魔法の使者であるキュウベえの奇跡によつて驚くべき治癒を遂げた。

「自分の足で走るの、気持ちがいいだろう？」

涼子の移動能力は速さを極め、その走る姿はまるで瞬間移動のように映った。

時は流れ、バマミ、佐倉杏子、暁美ほむらが魔法少女となり、希望と絶望の連鎖は続いていった。

やがて世界は円環の理を迎える。

円環の時は、廻り廻る運命の環（わ）。

魔法少女の救済を繰り返し、自らの魂は救われることなく永遠に空を環（めぐ）っていった。

「それじゃあ暁美ほむら、君の目的を聞かせてもらおうか」

杏子とゆう子が部屋を出てから、キュウベえは白い尾を振りながら問いかけた。

グリーンフィードの転生の時に聞きそびれたことを覚えていたようだった。

「何のことかしら？」

「今さらとぼけても仕方のないことじゃないのかい？　これまで君のしてきたことは、

ただ状況に応じてきたんじゃないことくらい僕にもわかっているさ。最初から意思を持って、目的を遂行するための行動だったんだらう？」

ほむらは黙ったまま答えない。

「これまで起こった出来事はすべて偶発的なことじゃない。すべて君の描いたシナリオ通りに事が進んでいる。ただ恐らく、巴ミの死は予定外のことなんじゃないかな。いくら目的遂行のためには冷静で冷酷な君でも、仲間を見殺しにするとは思えないからね」

魔法の使者でありながら、傍観者でもあるキュウベえは、すべてを見てきた。

時には魔法少女の契約をし、時には彼女らにアドバイスをしながらも、決して誰の味方をするわけでもなく、ただ自分たちの存在意義をまつとうするために存在していた。

キュウベえというこの宇宙生命体は、あくまで中立。

利己的な思考を持つただけであって、感情という概念を持たないことで、常に客観的に物事を判断していた。

「残るひとつのグリーンフィードを使って、君は何をしようというんだい？」

「インキュベーター、あなたは今の世界が正しいと思う？ 魔法が産まれない世の中になり、円環の理によって救済されるだけの魔法少女が存在する、この世の理は正しいものだと思う？」

「一体、何が言いたいんだい？」

この世の当たり前を正しいかと問うほむら。

当たり前のようにある世界は、当たり前ではない。

誰もが正常と認識するこの世界は、ほむらにとつては正常な世界ではない。

これは、ほむらにしか感じることでできない世界感だった。

「いま私たちが生きている世界がニセモノだと言ったら、あなたは信じるかしら」

「平行世界線のことを言っているのかい？ 君は時間を遡行する能力を持っているから、どこかで派生した、いや、どこからか分岐した世界線を生きているのはわかっている。

そして、それらの世界線は僕らには認識できない時間のパラドックスだ。この世界がニ

セモノという仮説を唱えるのであれば、君の知り得る他の時間軸もすべてニセモノとい

うことになる」

「仮説じゃなくて、本当のことよ。私が言うニセモノという根拠、ニセモノをニセモノと

する確固たる証拠。そのひとつが、円環の理」

「君は、この世の概念をニセモノと言うつもりかい？」

唯一、絶対の象徴である円環の理はまがい物だ、とほむらは言った。

「そして、そのニセモノを生み出してしまったのは私と、あなたよ。インキュベーター」

「数多の世界の運命を束ね、因果の特異点である円環の理。その成り立ちは、僕らには想

像もつかない。神をも超える存在である円環の理は、複雑であり単調、永遠であり一瞬、始まりであり終わりでもある。宇宙の概念を覆す程のものは、決して人の手で創造されるわけではないんだ。それを君はニセモノだと言い、まるで僕らが干渉してきたような言い方をする」

「覚えていないのも無理はないわ。これは私の記憶にある、私だけに残された、あの子の形見なのだから」

「あの子？」

「ええ。過去の全ての魔法少女を、諦めかけた私を、絶望の淵から救うためにあなたと契約を交わした魔法少女のこと。私は、彼女の願いとその存在の終焉を見守り、魔法少女たちの中で唯一すべての記憶を背負って生きているのよ」

ほむらの目に蘇る、因果律への叛逆と、宇宙の再編の出来事。

自分以外に誰ひとりとして覚えていない、ある魔法少女の記憶。

絶望によって魔女になる寸前の魔法少女の前に現れ、呪いを受け止めるだけの概念とも呼べる存在、円環の理となった少女の姿。

ほむらは話を続けた。

「今のあの子は、本当のあの子じゃない。言わばニセモノの存在。私の繰り返し返した因果と、あなたとの契約によって、誰にも手の届かない領域に辿り着いてしまった、神なら

ぬ神をも超える存在」

「なるほどね、円環の理はもともとは魔法少女だったというわけか。僕の知らない時間軸で起こった契約が、この世の絶対神を創り上げていたと。それで、神ならぬ神をも超える存在となったその子と、最後のグリーンフシード、そこから導き出す答えは何だい？」

「本当の彼女を、取り戻す」

ほむらは今まで、何度も何度も繰り返してきた。

その少女を救うために魔法の契約を交わし、少女を守るためだけに時間を費やし、生命を削ってきた。

——彼女との出会いをやり直したい。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守る私になりたい。

ほむらの願った魔法少女への祈りは、一点の曇りもない、ただその少女だけに向けられた願いだった。

しかし、出会いをやり直すという願いで時間操作の魔法を身に付けたものの、少女を守るという願いはついで叶うことはなかった。

「インキュベーター、私の願いは未だ叶わぬままなのよ。これがどういう意味かわかる？ あなたは言ったわよね、どんな願いも叶えてみせる、と。あなたの起こす奇跡は間違いない本物。人の生命を繋ぎとめることから神の創造まで、すべてを叶えてきた」

マミの願いも杏子の願いも、天生目涼子の願いもゆう子の願いも、ひとつとして反故になることなく、その後の結果がどうあれ間違ひなく遂げられてきた。

どんな小さな願いも、宇宙を再編させるような大きな願いも、魔法の使者であるインキュベーターの力によって実現されてきた。

が、暁美ほむらの願いだけは完全な成就を遂げることなく、ただ時間操作の魔法を得て、少女との出会いを何度も繰り返しただけの宙ぶらりんな状態だった。

ほむらは長い黒髪を撫でてから、左手の甲にあるソウルジェムに揺れる僅かな穢れを見つめた。

「勘違いしないでね。私はあなたの力を責めているわけではないわ。中途半端に叶ってしまった私の願いは、私の責任。これまで何度も繰り返してきた彼女との出会いが膨大な因果となり、この世にニセモノの彼女を生み出してしまったのは私の失敗。私はあまりにも知らなすぎた。軽率な時間遡行を繰り返し、この世界を歪めてしまった」

それからソウルジェムに右手を重ね、静かに目を瞑った。

「でも、幸い私の魔法は時間操作。この八咫（やた）の盾に施された砂時計は、すべての物質の時間に干渉できることが証明されたわ」

紫色の光と共に、ほむらの左腕には時を操る盾が装着された。

ほむらは、グリーンシードの転生で失った盾を蘇らせたのだった。

と同時に、ほむらの左手にあるソウルジェムに黒い揺らめきが舞った。穢れが、増したのだ。

「そうか、天生目ゆう子は、その実験だったんだね」

天生目涼子のグリーンフシードを手に入れ、時間操作の魔法を駆使することで、グリーンフシードを元のソウルジェムへと転生させる。

ほむらの時間遡行という魔法は、自らの身体と記憶だけに囚われずに、他人の魂の宝珠さえも時を逆行させた。

「最後のグリーンフシードは私が手に入れる。そして私の物語は、本当の彼女を取り戻すことで幕を閉じることになるわ。私の奇跡は、これから始まるのよ」

ほむらは盾の中から、大型拳銃のIMIデザートイーグルを取り出すと、ガチャリという音を立ててスライドを引いた。

「暁美ほむら、君のやろうとしていることは、因果律そのものに対する反逆だ。幾多の並行世界を横断し、自らの到達点を探し求めた結果に得られた答えが、この世の絶対の象徴である円環の理を覆すことだとはね。まあ、いいさ。僕はあくまで傍観者だ。君が望む結末をゆつくりと見させてもらうよ」

ところで……、とキュウベえは部屋の壁に掛けられているディスプレイモニタのような絵画の1枚を見て

「あそこに映っている少女が、君の言う魔法少女かい？」

ほむらがこれまで出会ってきた魔女や使い魔や、魔女の結界らしき風景が描かれている絵画の中に1枚だけ、ひとりの少女が映っているのを見つけ尋ねた。

その少女は大人しそうな、優しそうな笑顔を浮かべていた。

他の絵に紛れて目立たない場所に映っていたが、部屋の隅にいるキュウベエの角度からだけ覗くことができる位置に飾られていた。

「あの子の名前は、何ていったかな」

「……まどか。鹿目まどか、よ」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第3部

5話）

夜の見滝原市は、立ち並ぶビル群が煌びやかにライトアップされ、川沿いの舗道にも眩い光が灯り、夜空を薄明るく照らしていた。

近未来的な都市は、白色や黄色やオレンジ色の光に飾られ、空に浮かぶ望月と共に幻想的な夜曲が奏でられているようだった。

その中で、ひと際高くそびえる高層ビルの屋上。

あまねく散りばめられた光の群れに立つ、見滝原で最も高い建物の上に、杏子とゆう子はいた。

市内を一望できる場所から、まるで眼下の星空を見下ろすように目を見張っていた。

穢れた魔力を発していないソウルジェムを持つ螺良あかねは、魔力探知で居場所を特定することができない。

だから杏子は、見つけるといふよりも、起こるのを待っていた。

「アイツの狙いはあたしたちだ。魔女ではないから、呪いを振り撒いて普通の人間に危害を加えることはしない……はずなんだよ」

こちらが魔力を行使しなければ、相手も自分たちを見つけることはできない。きつと何か動きを見せるはずだ。

ほむらと3人、それぞれが役割を分担し、杏子が見つつけ、ゆう子の移動能力で適当な場所に誘導し、ほむらの光の矢で仕留める。

これが杏子の考えた作戦だった。

（マミは命懸けで、あの黒いヤツを救ってみせたけどな……）

弱き者を救うのが本当の魔法少女、マミはそう言っていた。

「あたしには、コイツを守り通すことで精一杯さ」

「え？　杏子ちゃん何か言った？」

「いや、何でもない。それよりも……」

杏子は屋上の欄干から上半身を乗り出し、遠くを見つめ

「あそこを見てみるよ。川の向こう……もつと右の方の、あの時計が付いている建物の右」

そう言つて指差した先には、小さく火の手が上がり、黒い煙が立ち上っていた。

「火事、かなあ」

近代設備の整った見滝原で、火事は珍しい。

すべての建物は外壁に耐火建築がされており、また自動消火設備も施されているので、建物から火が出ることも自体、ほとんどなかった。

「炎が、揺れてる」

杏子には、踊るように揺れている炎が見えた。

「あんな遠くなのに、よく見えるね杏子ちゃん」

「へへ、あたしは目がいいんだ」

他の誰に褒められてもあまり嬉しさを見せない杏子だったが、ゆう子の前では素直だった。

が、照れる顔もほどほどに

「火の勢いが強いな。どんどん燃え広がってる」

と、少し不安げに言った。

週末の夜、明かりの灯る建物から火が出ているということは、中にいる人に被害が及ぶかもしれない。ぶかもしれなかった。

「どうする杏子ちゃん？」

「こんな時だ、できれば関わりたくないけどな」

「うん、そうだけど……」

「あれがただの火事なら、あたしたちの出番じゃないさ。だけど、目の前で起こっている不幸を放っておくなんて、あたしたちにできるわけないよな」

杏子は「よっ」と言って欄干の上に飛び乗ると

「ゆう子、お前の翼で、あそこまで飛んでいけるかい？」

後ろに手を伸ばした。

「杏子ちゃん」

ゆう子はニコッと笑い、その手を握ると

「しっかりと掴まってね」

勢いよく、ビルの屋上から飛び立った。

瞬間移動のまばたきを繰り返し、数十メートルおきに現れては消え、消えては現れながら、ほんの数秒で川向うに辿り着いてしまった。

揺れる炎は、思ったよりも大きかった。

目の前で燃える建物は、遠くから見たよりも激しく、メラメラとした火炎が噴き出していた。

さつきまで見えていた建物の姿は、ちょうど時計が付いているビルの裏側に位置していたので、杏子には小さく揺れる炎が垣間見えていただけだった。

しかし、近くまで来てみると炎の大きさは想像以上で、側面の窓から立ち上る火の粉、黒い煙、焼けつくような熱気は、杏子たちがこれまで見たこともないような火災だった。

「こ、こいつはすげえ……こんなに燃えているんじや、中に人がいたらひとたまりもないぞ」

杏子は、炎の熱気を片手で遮るようにして建物を見上げた。

「でも、周りに人がいないのは変だね。誰もこの中にはいなかったのかな」

「ああ。それに、これだけ火の手が上がっているのに、助けにくるヤツも、見に来るヤツもいないってのはおかしいな」

逃げる者も、消防も、見物人も、辺りには人の気配すら感じられない。

目の前の炎だけが、だた揺れているだけだった。

「おおい！ 誰かいるのか!？」

逃げ遅れている人がいないか、助けを求める者はいないか、杏子は大声で呼びかけた。が、返ってくるのは轟轟と燃え盛る炎の声だけだった。

「杏子ちゃん、あんまり近くに寄ると危ないよ」

「わかってる。誰かいないか確認してるだけだ」

杏子が再び声を上げようとした時、炎の熱で上階の窓がバーンと砕け、ガラスの破片が降り注いだ。

「うわっ!」

ふたりは慌てて後ろにさがり、落下してくるガラスの破片から身を躲した。

地面に落ちた破片から小さな火が噴き、ポウつと燃えた。

「……………えっ?」

ガラスは跡形もなく焼け消え、路面に黒いコゲを残した。

「ゆう子、今の見たか？」

「うん」

ガラスに火が付くのを目の当たりにし、ふたりに緊張が走った。

これは、普通の火ではない。

「ひよつとしたらあたしたちは、まんまと誘いに乗っちゃまったのかもしれないぞ」

やがて建物の内部を燃やしていた炎が外壁を覆い、大きな火柱のようになった。

見滝原の夜空を焦がすほどに立ち上る炎は建物全面に廻り、やがて火炎の先が生き物のように持ち上がる。

その形は、花弁が開いた花の形を象った。

波打つ紅い花びらをなびかせ、美しくも禍々しい大花が開く。

建物を覆う火柱を茎のように伸ばし、巨大な炎の花が咲いた。

「こいつ、ただの炎じゃない」

「一体どういうこと？」

「これは、ただ燃えているんじゃない。炎の花が咲くなんて、普通は起こることじゃないってことさ」

そうやって杏子は、炎の熱気にたじろぐゆう子をさがらせようとした。

赤々と燃え盛る炎に、ゆう子の顔が照らされている。

その左耳にある赤紫色のソウルジェムが、眩い光を放った。

「やっぱり、そういうことか」

杏子はソウルジェムの光を見て確信した。

そしてもう一度、炎の花を見上げると

「こいつは……魔女だ」

落ち着いて、ゆっくりと言った。

炎の花はよく見ると、真っ赤な火が揺れているようでもあるが、妙に立体的で、形がはつきりしている。

具体的というか、実体的というか、炎の肉体を持った生き物のようだった。

(でもおかしい。魔女はこの世に産まれないし、円環の理だつてある)

円環の理は、すべての魔女の存在を許さない。

魔女を産みだすことも、魔女が存在することも認めないこの世の理に反して、ゆう子のソウルジェムを発光させている。

巨大な炎の花が、大きく揺れた。

風になびく野花のように、ゆったりと、おおらかに、茎から先の大花が揺れた。

その動きは意思があるように、炎の光をゆらめかせた。

辺りに熱気が振り撒かれ、夜の見滝原は炎の街へと変わった。

夜空を焦がし、周囲の建物を紅く染め、街はたなびく炎に巻かれた。

「これは、魔女の結界!」

熱く、厚い炎の結界が包み、杏子たちをジリジリと熱した。

右も、左も、上も、すべてが炎の壁で覆われてしまった。

「火……火の穂だよ」

ゆう子は炎を見上げて言った。

「火の穂?」

「そう。炎のことを、そうやって呼ぶことがあるんだって」

「なるほどな。魔女は産まれないはずなのに、ソウルジェムに反応する火の穂の化け物、か」

紅く濃み、ジリジリと肌を焦がす異空間。

火の穂の花びらからポタリと炎の雫が垂れ落ち、地面をじんわりと溶かした。

「今の世の中で、こんなことできそうなヤツはひとりしかいねーな。アイツは何でもできる万能魔法少女ってことか」

「これが、魔女なの?」

「ソウルジェムが光るのは、魔女の証だ。あのちびっ子は魔女が産まれない世の中で、魔

女を産み出しやがった」

未だかつて見たこともない化け物を前にし、焼け付く熱気で杏子の頬に大粒の汗が流れた。

「まったく、とんでもないヤツを敵に回しちゃったモンだ。あたしたちの第2ラウンドは、火の穂の魔女……か」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

6話）

「おいほむら、聞こえてるか？」

揺れる火の穂の魔女を前に、杏子はゆう子を背中にかばいながらテレパシーを送った。

魔法少女同士のテレパシーは、半径100メートル程が圏内だが、キュウベえという電波塔を介すことで、ほむらにも声を届けることができた。

『ええ、聞こえてるわ。とんでもない魔力の波動と一緒にね』

ほむらの声が、杏子たちに伝ってきた。

ここから数キロメートルは離れているであろうほむらのソウルジェムにも、火の穂の魔女が放つ、魔力の波動は伝わっているらしい。

「あのちびっ子は、魔女を産み出したみたいだぞ。一体どうなってんだ？」

『すべての絶望を忘れるソウルジェムの特性かしらね。魔女は呪いや絶望が実体化した姿。螺旋あかねは、自らの呪いや絶望を吐き出すことですべてを忘れていく、ということかしら』

「溜め込むよりもよっぽどタチが悪いじゃねーか」

『それと、そいつは成り立ちこそ魔女と同じかもしれないけど、グリーンシードを宿していないはずよ。簡単に言うくと、魂の無い魔女ってところね』

「なるほどな。魂を持たないから、円環の理もお構いなしってことか。ますます何でもアリなヤツだ」

円環の理が救済するのは、穢れが溢れたソウルジエムと、その魂の器である持ち主の身体。

魂を持たず、穢れた肉体のみでこの世に産み出された魔女は、意思もなく、ただ呪いと絶望を振り撒いているだけだった。

『思っていたよりも頭の切れる魔法少女ね。街を燃やすことで、あなたたちを見事におびき出したわ』

「ちえっ……余計なお世話だったの」

ほむらもまた、杏子と同じ見解だった。

魔法少女はソウルジエムの魔力探知で魔女を見つけることはできても、呪われた魔力を発しない魔法少女を見つけることはできない。

が、事を起こせば杏子たちは現れる。

ふたりは見事に引っ張り出されてしまった。

「とにかく、こんなヤツが現れるってことは、あのちびっ子が近くにいるってことだ」
炎の結界に閉ざされた杏子は、注意深く辺りを見回した。

が、周囲の建物を紅に染め、肌や髪を焼きそうな熱さの中に見えるのは、ただ揺れる炎の空間だけだった。

（おかしいな、どこにも姿は見えないぞ）

それどころか、火の穂の魔女も、大花を揺らしているだけで杏子たちを攻め立てようともしなかった。

「杏子ちゃん、服が……！」

乾いた空気に火の粉が舞い、杏子の服に火が燃え移った。

ミントグリーンのパーカーの裾に小さな炎がポツと灯る。

「え？ うわっちちちち！」

杏子は慌てて火を払い落とした。

魔法少女でない杏子は、魔力の熱をもろに受ける。

長い髪の毛先も、火の粉に煽られて焼けた匂いを漂わせた。

「くそっ！ あたしは生身のままでからな。このままじゃ丸焼きになっちゃう」

魔法少女であれば、身体の周りが薄い魔力の膜で覆われるので、この程度の放射熱で焼かれることはない。

しかし今の杏子は魔法少女にもなれず、魔力も纏っていないので、灼熱の空間で身体が焼かれようとしていた。

「杏子ちゃん、さがつてて。コイツは私がやつつける」

「ヒョッコのくせに何言ってるんだ。お前ひとりで何ができるってんだよ」

「杏子ちゃんは戦えないんだから、私がやるしかないんだよ。だからお願い、どうしたらやつつけられるか、教えて」

「はは……一人前なことを言うようになったなあ」

と、杏子は苦笑いをしながら火の穂の魔女を見上げ

「アイツはグリーンフシードを持たない魔女だから、つまり使い魔と同じってことだと思う」

物理的に叩き伏せれば、倒すことができるはずだ、と言った。

杏子の考えは間違っていないかった。

魔女も使い魔も、つまりは呪いや絶望が具現化した姿。

その肉体を破壊すれば、倒すことができる。

しかし、

『使い魔と決定的に違うのは、魔力の大きさと生命力の強さよ』

ほむらのテレパシーが、ふたりに聞こえてきた。

『私たちのいるところまで伝わる、この魔力の波動。そいつを産み出した本体とまではいなくても、相当な魔力を宿した魔女よ』

「ああ、わかつてる。でも、やってみるしかねえな」

それからゆう子をチラつと見て

「魔法少女ゆう子サマの、初魔女退治、か」

目を瞑り、八重歯を覗かせた。

「いいか、ゆう子。お前の短槍じゃ、短くて間合いが足りない。だから、あたしの槍を使うんだ」

そう言って杏子は、自らの赤い長槍を出現させ、ゆう子に手渡した。

杏子の額に、じつとりと汗が滲んだ。

「あたしの槍は伸縮自在だ。もうあたしはチリ程も魔力を使えないから、お前が魔力をコントロールして、その槍を使うんだ」

「わかった」

「それと、あの炎の熱はやバイ。いくら魔力の膜を纏ったお前でも、炎に直接焼かれたら黒コゲになっちまう」

「うん」

「そこで、お前の移動能力が役に立つ。一瞬で間合いを詰めて、その槍でアイツの中心部

分を貫いて、またすぐに離れるんだ」

「私にしかできない戦い方だね」

「そういうこと。でも……チャンスは1回だ。1発で仕留められなきゃ、その槍は……もう、出せない……からな」

杏子の声が、だんだんと苦しくなってきた。

息が荒く、ビツシヨリと汗をかき、目の周りが黒ずんできた。

「杏子ちゃん、平気？ 具合でも悪いの？」

「へへ、その槍を出すのに、ちよつぱり魔力を使っちゃまったからな。大丈夫……この程度、へでもねえ」

杏子は、片頬を歪めながらゆう子の肩に手を置き

「魔法の力は腕力や体力じゃない。魔力のコントロールが大事だ。あたしの槍を貸してやるんだから、しくじるんじゃねえぞ？」

苦し気な顔を隠すように、ニカツと笑った。

「ありがとう、杏子ちゃん。私に任せて」

ゆう子は精悍な表情で火の穂の魔女に向いた。

(クソつ、マズったかな……槍を出すだけならまだイケると思っただけど……)

杏子のソウルジェムが収まる指輪から、黒いモヤが漏れ出した。

魔力の限界は見切っていたはずだったが、穢れを浄化していない状態で使った微量な魔法で、最後の一線を越えてしまったかもしれないなかった。

（どっちみち、ゆう子の槍じゃ仕留められない。あたしが戦えないんだから、仕方ないよな）

ゆう子は杏子の元を離れ、火の穂の魔女に近づくと、足を大きく開き、槍を構えた。

赤い長槍にゆう子の魔力が同調し、赤紫色の光を帯びた。

別人の魔法少女の武器がシンクロすることは、普通はあり得ないが、杏子とゆう子は魔力の波長パターンが酷似している。

それゆえに成せる、魔力のクロスオーバーだった。

（なんとか、最後まで見届けることはできると思うけど……）

これまで火の穂の魔女は、その大花を揺らしているだけだったが、ゆう子の魔力に反応したのか、揺らめく花びらをピタリと止めた。

轟轟と燃える音を響かせたまま、花卉の頭をゆっくりと垂らし、灼熱の身体をゆう子に近づける。

足元の路面はその熱に晒され、灰色の煙を立ち上らせた。

（まだだ、ゆう子。いま仕掛けたら、先に攻撃されちゃう。タイミングを計るんだ）

杏子は声を発しなかった。

テレパシーも送れなかった。

一切の魔力を使うこともできず、熱波に押されてよろめきながら、後ろへ後ろへと追いやられていた。

ゆう子も動かなかった。

炎の火花を見上げたまま、目を見張り、焼け付く熱気を魔力の膜で相殺しながら、ただじつと構えたまま動かなかった。

（そうだ。アイツが何か動きを見せたら、そこがチャンスだ）

ゆう子の移動能力なら、どんな攻撃も一瞬で躲して攻撃に転じることができる。

誰よりも速い移動能力は、必ず先手を取ることができるが、後の先を取る方がその効力を発揮する。

ゆう子もそれをわかっているのか、杏子の考えどおりに機を待っていた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

7話）

暁美ほむらには、杏子たちの様子は見えていない。

キュウベえが介している魔法のテレパシーで、状況はなんとなくわかっていたが、火の穂の魔女が発している魔力の波動や、杏子が戦えないことを考えると

（もしかしたら、勝てないかもしれない）

とも考えていた。

「どうしたんだい？ 助けに行かないのかい？」

キュウベえは、部屋の中にある不思議なディスプレイを眺めながら、後ろ姿のまま問いかけた。

まるでほむらの考えを察しているような、ほむらの迷いをえぐるような言葉が、静かな部屋にこだました。

「私の魔力も、あと一度だけ。最後の望みを失ってしまうわけにはいかないわ」

「あのふたりが犠牲になってもかい？」

「……ええ、そうよ」

「もし杏子たちが負けてしまったら、この街は焼け野原になってしまいうだろうね。人々の犠牲も計り知れない」

「でしようね」

「あのふたりと、街をひとつ失っても構わない、ということかい？」

「ええ、そうよ」

「ふうん……ところで……」

と、キュウベえはデイスプレイモニタを眺めたまま

「ここに映っているのは、君の記憶の欠片なのかな。たぶん、君が今まで出会ってきた使い魔や魔女や、結界の記憶が映し出されているんだろうね」

なぜか話題を変えるように呟いた。

ほむらには背を向けたままで、声だけが再び部屋の中に響いた。

「私の時間操作魔法のひとつ。私の中にある、時の記憶が映像に映し出されているのよ」
「なるほどね。つまり、念写といったところか」

「そのモニタが、勝手に私の記憶を映しているだけよ。それがどうかしたかしら」

「じゃあ、君の記憶にないものがあつたとしたら、それは他の誰かの魔力が混じっているということなのかな」

「……? どういうことよ?」

ほむらはギクリとした。

それは、キュウベエの言っていることはどれも正しく、ほむら自身の記憶にない映像が映し出されることはあり得ないからだった。

ただひとつの事、鹿目まどかに関する記憶を除いて、ほむらの記憶も、キュウベエの記憶も、魔女や魔法少女についてはリンクしているはずだった。

「僕は今まで、あんな恐ろしい姿をした魔女を見たことがないんだけどね」と言つて、キュウベエは振り向いた。

背中を向けたまま、頭だけをこちらに向けたキュウベエの後ろには

長い金髪、赤い瞳、まとわりつくようなネットリとした長い腕。

そして、薄笑いを浮かべたような不気味な口元の、女の姿が映っていた。

それはとても悲しそうな顔でもあり、憎しみに満ちているようでもあり、およそ人は思えないような形相で、言葉で表すなら

執着心のかたまり

のような、そんな……魔女の姿が映し出されていた。

その姿は、ゆらゆらとうごめいているようだった。

ほむらの左手の甲にあるソウルジェムが、光を放つと

魔女の映るディスプレイモニタから、黒い瘴気のようなものが流れ出た。

瘴気は部屋の床まで流れ出て、キュウベえの足元からほむらの足元まで広がってき
た。

やがて

「オオオ……オオオオオ……」

という呻き声と共に、女の声とも男の声とも取れない、まるで何人もの声が混じり
あつたような、不気味な声 flowed.

『うふふ……つケタ』

思わず耳を塞ぎたくなるような、とても気分の悪い、嫌な声が、部屋の中に響き渡る。

ほむらは顔を歪め、目の焦点がズレる感覚に陥った。

(これは……頭に直接聞こえてくる)

『声ガ聞こえタからもしかシテと思つたら、キュウベえも一緒にイタんだね』

黒いモヤが、闇の波となつて足元を埋め尽くす。

(声? まさか、杏子とのテレパシーを辿られたの?)

『うふふ、そうだヨ。忘レタの? ワタシも魔法少女なんダカラ、あなたタチの声はみん
な聞こえテルんだヨ』

(心を読まれた!)

恐ろしい表情を浮かべた魔女は、ほむらの思考を読んできた。

身体をゆらゆらと揺らしているのか、映像が揺れているのか、その姿は薄紫色の、ノウゼンカズラの花を逆さにしたような恰好をしている。

ほむらの心の声を読み、脳に直接語り掛けてくるようにテレパシーで言葉を送ってきた。

「……螺旋あかね、だね」

キュウベえは確かな声で言った。

『わたしのコト？ そうだったカモしれナイけど、そうデナイかもシレない。ソレヨリあなた……』

映し出されたモニタからほむらに向かって、魔女の顔が一気に近づいてきた。

ネットリとした腕が、身体に絡みつく。

『アナタ、わたしと同じニオイがすルのね』

いつの間にか、冷たく濡れた両腕がほむらの肩に回り、魔女の顔が耳元でささやいた。ほむらはゾットとして、魔女の腕を振りほどき、思わず八咫の盾を廻した。

盾の内部に魔力が伝わり、内蔵された歯車が高速回転する。

その瞬間、周囲は時の流れを止めた。

これは、ほむらの時間操作魔法。

辺りはカラフルな色彩を失い、今この時は、ほむらだけが動ける特殊な時間世界と

なった。

幾度となく繰り返してきた時間操作の魔法。

流れを止めたこの時は、ほむらだけの絶対領域でもあった。

ほむらだけに見える、ほむらだけが動ける、ほむらだけが感じられる世界。
が、

『どうシタの？ 何ヲ安心してルの？』

冷たい腕が再びほむらを抱きしめ、耳元に寄ってきた魔女の顔から生温かい息が漏れた。

八咫の盾は歯車が廻り、時間操作の魔法は発動している。

「な、なぜ動けるの？」

時の止まった世界の中で、ほむらは唯一絶対の存在であるはずなのに。

『うふふ、知りタイ？』

停止した時の中、ふたりの声だけが部屋の中に響いた。

黒いモヤはもうもうと流れていた。

『コレはアナタの闇なのヨ。アナタの抱える闇ナノ』

ほむらは、まとわりつく腕から逃れようとしたが、ネットリと絡みついた青白い腕はどうしても解けなかった。

『アナタは何をソナナに固執してルの？　ワタシたちの運命なんて、もう決まっテルんだよ』

「な、何を……？」

『魔法少女ハ、ヤガテ呪いに滅ビル悪魔ノ子。コレマデ幾人も魔法少女が辿つてきた運命ヲ、知つているでしょ？』

ヌルリとした魔女の顔が、ほむらの頬にすり寄る。

『ワタシたちは、あそこにイル、インキュベーターによつて生み出サレタ出来損ないの悪魔ノ子。有史以前カラこの星の文明に干渉シ、作り上げられタ魔法少女は、あの宇宙生命体の糧デしかナイの。宇宙のエントロピーを覆すエネルギーの回収なんてノハ、彼らの驕り』

冷たく濡れた指でほむらの頭を撫でると、長い爪をこめかみにえぐり込ませてきた。

『見せてアゲル』

細い指はグリグリとほむらの頭の中に入り込んできた。

触覚と痛覚がマヒし、脳に直接魔力が干渉する。

「……っ！」

ほむらは身体を硬直させ、声にならない叫びをあげた。

続
く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

8話）

火の穂の魔女と、ゆう子の対峙は続いていた。

赤紫色に発光した長槍を構え、灼熱の炎に照らされるゆう子の顔は、とても落ち着いているように見えた。

が、杏子は平静ではなかった。

（……くっ！…この熱気、どんどん激しくなってる）

轟轟と燃え盛るこの空間は、生身の杏子を容赦なく焼こうとしていた。

紅く咲く魔女の花だけでなく、周囲の空気までもが燃えている。

ゆう子の後方から見守る杏子だったが、魔女から近かろうが遠かろうが、その熱波はもはや身体を焼くギリギリのところだった。

そして、それよりも

（穢れの溢れが、止まらない……）

杏子の左指に収まるソウルジェムからは、ゆつくりと着実に黒い穢れが溢れていた。

魔女の熱に焼かれるのが先か、ソウルジェムがグリーンフシードに変わるのが先か。

どちらにしても、杏子の生命は風前の灯火だった。

その時、火の穂の魔女が動いた。

炎を象ったような巨大な花びらを一旦閉じてから、再びそれを開く。

花びらの中心が白く光り、魔力のエネルギーが集約された。

ゆう子はフツと後ろの杏子を振り返ったような動きを見せてから、力いっぱい飛び上がり、瞬間移動を伴って、火の穂の魔女の真上に現れた。

(ダメだ！ まだ早い！)

杏子は心の中で叫んだ。

ゆう子が飛び上がったタイミングは、火の穂の魔女が攻撃を仕掛ける寸前だった。

杏子の思ったとおり、火の穂の魔女は真上に現れたゆう子に反応し、首をもたげるように花弁を上向けた。

そしてゆう子の身体を正面に捉えようと、真っ白な炎を吐き出した。

今までの炎とは、比べものにならないくらい強力で、美しい光焰。

膨大な魔力のエネルギーを、真っ白な炎にして放出し、一瞬でゆう子を飲み込んだ。

「――！」

魔女の光焰は杏子の叫び声をかき消した。

すべての物質を焼き尽くす炎と閃光が、辺りを白一色に染めた。

まるでホワイトアウトしたかのように白の乱反射が杏子の視界を遮る。

（なんて魔力だ……何をどう間違えたら、あんなのを産み出すことができるってんだ）

杏子は目を細めながら、ようやく開けてきた視界の中にゆう子を探した。

あの光焰をまともに受けていたら、跡形もなく消えてしまうだろう。

が、ゆう子には瞬間移動能力がある。

光焰を躲し、どこからか反撃を仕掛ける手はずだったが……

「……ゆう子？」

見上げた上空には、白く焼けただれた夜空が広がっているだけで、ゆう子の姿が見当たらない。

まさか、あの光焰を躲せずに焼失してしまったのか。

（いや、魔力の波動は感じる。ゆう子はどこかにいる）

見滝原の夜空を焦がした火の穂の魔女が、再び魔力を込め始める。

花びらを閉じ、中心部分を白く光らせ、光焰が集約されていく。

（またあれをやる気かよ）

さつきと同じく、上空に向かって構えていた。

（え？ 上に、いるのか？）

上空遙か彼方から、赤紫色の光がどンドン近付いてくる。

それは巨大化された杏子の槍だった。

「あれは！」

燃え盛るビルと同じくらいはありそうな、巨大で壮大な赤い槍を抱えたゆう子が、火の穂の魔女に向かって落ちて落下してきた。

花びらの口を開けた魔女が、再び白い炎を吐き出す。

「ゆう子、飛べ!!」

吐き出された炎がゆう子と槍を飲み込もうとした刹那、まばたきによる瞬間移動が発動する。

一瞬で消え、炎を掻い潜ったゆう子は、火の穂の魔女を真上から

「えええい！」

と気合の声と共に、一直線に突き刺した。

巨大な槍は、炎を纏う魔女を上から下まで見事に貫いた。

着地の衝撃でゆう子は地面に落ち、固い路面に弾かれて杏子の目の前まで転がってきた。

「いてててて……」

身体の所々に軽い焦げ跡を残したゆう子が、起き上がりながら頭を抑える。

「えへへ、着地は失敗しちゃった」

が、杏子の視線は、槍の突き刺さった魔女に向いていた。紅炎の火花が、徐々に黒く朽ちていく。

やがて魔女の身体は炭を砕くようにパーンと割れて、粉々になって消えてしまった。赤紫色の魔力を帯びた槍は元の大きさに戻り、地面に突き刺さっていた。

その様子を、目を丸く見開いて眺めていた杏子はやっと、自分の足元にいるゆう子に
気付き

「スゲえ……」

と眩き、さらに

「スゲえぞ、ゆう子」

驚いたように、呆れたように、そして嬉しそうに言った。

「最初に姿を消した時、一体どこに飛んでたんだ？」

一撃目の真っ白な炎を瞬間移動で躲した後、しばらく姿を見せなかったのはどこにいたのか。

ほんの数秒ほどだったが、杏子の視界からは完全に消えていた。

「あの時は、ずうっと空高くに行ってたんだ。私の瞬間移動はね、まばたきで消えて現れるんだけど、目を開けるまでの時間を延ばせば移動距離も増えるし、姿を現すまでの時間も長くなるんだよ」

「そうか、だからどこにも見当たらなかったのか」

「うん。それに、私はあの大きな槍を振り回す力はないから、落下のスピードで突き刺すのが一番いいと思ったから」

「お前……」

魔法少女としての戦いのセンスが高い。

ヒョッコだと思っていた半人前の少女が、わずか1日でこれだけの戦い方をできるようになるとは。

「大した……もんだ」

「ううん、違うの。杏子ちゃんの槍が凄い。私の魔力を受け入れて、本当にあんな大きくできるなんて」

ゆう子はそう言っつて、地面に突き刺さった槍の方を見ると、元の大きさに戻っていた赤い槍が、青白い光の揺らめきに包まれて立ち消えた。

杏子の槍は、その魔力を失った。

そして、すぐ後ろで

ドサッ

と、人が倒れる音がした。

振り向いたゆう子の目の前には、杏子の身体が力なく倒れていた。

「杏子ちゃん？」

目の周りが黒ずみ、唇は色を失い、精気を無くした顔で、杏子は横たわっていた。

「杏子ちゃん！」

「最後に凄いのを見せてもらえたよ。……見事なモンだった」

「どうしたの杏子ちゃん！」

「へへ、元々あたしの魔力はもう限界だったんだ。あの槍を出したのが、あたしの最後の魔力だったんだ」

杏子の左指、銀の指輪に収まるソウルジェムから、黒い穢れがゆらゆらと溢れていた。これまで一度も穢れを浄化せず、ほとんどすべての戦いで魔力を使い続けてきた。

その魂の宝珠が今、穢れの限界を超える。

「ダメだよ、杏子ちゃん。グリーンフィールドになんか、なつちやダメだよー」

「仕方ないんだよ。これがあたし達の運命なんだ。遅かれ早かれ、魔法少女はこうなるのさ」

「待って、私だって癒しの魔法は使えるんだよ！ 杏子ちゃんの身体を癒すことができれば……」

ゆう子は慌てて魔力を開放し、杏子に癒しの魔法を当てる。
が

「無駄だった。あたし達はグリーンフィードがなきゃ、穢れを浄化することはできないんだ。余計な魔力は使うな」

「でも、でも……」

ゆう子は涙を浮かべながら、必死で魔力を向けた。

「ありがとな、ゆう子。お前がいてくれたおかげで、あたしはマミの言っていたことが分かった気がするよ」

「杏子ちゃんダメだよ、諦めないで！」

杏子のソウルジェムが、穢れの解放を始めた。

「いいんだ、もういいんだよ。あたしは良くやった……だろ？　ただひとつ、残念なのは

……」

杏子は言葉に力を失い

（あたしが守るべきものを、最後まで守り通せなかったこと、かな……）
静かに目を閉じた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

9話）

赤い魂の宝珠が、黒い闇の光を放つ。

歴戦の魔法少女である佐倉杏子も、その膨大な穢れによって、遂に最期の時を迎えようとしていた。

（あたしは良くやった……だろ？）

「だめー!!」

叫び声と共に、ゆう子が目を大きく見開いた。

強い赤紫色の光を纏い、魔力の放出が最大になる。

杏子を包んでいた癒しの魔法が、左指のソウルジェムに集まり、幾何学模様のような、丸い魔法陣が敷かれた。

円形の魔法陣の中で、大小ふたつの円が重なる。

——魔法は、戦うために使うものじゃないんだ

ゆう子の心に、姉・天生目涼子の声が響いた。

魔法少女の穢れは、使用した魔力の対価として蓄積される。

その穢れを、グリーンシードという負の器に移し替えることで、ソウルジエムは輝きを取り戻す。

穢れを吸い取ったグリーンシードは魔女の卵となり、やがて呪いと絶望をまき散らす魔女となる。

その負の連鎖が、覆された。

赤紫色の魔法陣が、杏子のソウルジエムに重なると、黒い結晶を生み出した。

ゆう子は、魂の宝珠に蓄積された穢れを、物質化して取り出したのだった。

そこに強い魔力の波動を向け、穢れの結晶に当てる。

黒い結晶は、癒しの魔法の反作用で光の粒となって消えてしまった。

魔法の寵児と称された天生目涼子から受け継いだソウルジエムは、これまで魔法少女の誰もが成しえなかった

穢れを癒す魔法

を目覚めさせた。

「杏子ちゃん」

その優しい呼びかけに、杏子はゆっくりと目を開ける。

穢れの解放は止み、黒く濁っていたソウルジエムは美しい輝きを取り戻していた。

「一体、何が……」

杏子は、わけがわからないといった表情でゆう子を見た。

顔には血の気が戻り、唇は赤く、髪は艶やかに、生き生きとした肢体を起こす。

「何を、したんだ？」

「えへへ、暁美さんとキュウベえが言ってたことって、これだったんだ」

「まさか、もうひとつの能力ってのは、今の……」

「うん。たぶん、私の眠っていた力って、こういうことだったんだよ」

ゆう子の実姉、天生目涼子が身に付けていたのは、魔法少女の中でも突出した癒しの能力。

そして、そのソウルジェムを受け継いだゆう子が願った希望の祈り

——杏子ちゃんと、友達でいたい

この友愛の祈りが合わさり、融合と相乗効果として生まれた魔法。

究極の癒し魔法は、消滅寸前の杏子を救う

穢れの癒し

だった。

かつて天生目涼子は、癒しの魔法で穢れを浄化できないかと考えたことがあった。

しかし、天才的な癒しの能力を持っていた涼子ですら、魔法で穢れを浄化することは

遂にできなかつた。

それもそのはず、魔法の力で穢れを浄化するのには、魔法少女にとっては起こりえないはずだった。

だが、魔法少女・天生目ゆう子は、存在自体がすでにその歴史を覆している。

グリーンフシードを逆行させ、新たな希望の祈りで誕生したソウルジエムは、癒し魔法と友愛の力が乗算し、かけがえのない仲間を救う『穢れの癒し』を実現させた。

「なんてこつた。そんなのアリか？」

杏子は本当に驚いた。

魔法少女に成りたてのヒヨッコだったゆう子は、この1日ですば抜けた戦いのセンスを発揮し、究極の癒し魔法を使って見せた。

「よかつた、杏子ちゃんを助けることができてる。本当にキュウベエの言つたとおりだつた」

「ソウルジエムが綺麗だ。まっさらな状態にまで浄化されてる」

赤く輝くジエムは、すべての穢れが抜けている。

この美しい輝きはいつ以来だろう、と杏子は思った。

「グリーンフシードが手に入らなくなつてから、こんな晴れやかな気持ちになつたは久しぶりだ」

やがて魔女の結界は解かれ、辺りはいつもの見滝原の夜へと戻った。

杏子は立ち上がると

「それにしても今の魔法、お前の魔力を消費して使うモンなんだろう？」

そう言つて、ゆう子の左耳に当てられたイヤリング型のソウルジェムを見た。

ジェムには穢れの影もなく、ゆう子のカラーである赤紫の光を放っていたが……それは妙に色濃く見えた。

「そうだと思ふけど……」

「自分の穢れを浄化することもできるのか？」

「どうだろう……。使い方は何となくわかったけど、やってみないとわからないかな」

「いや、やめておきな。その魔法のおかげであたしは助かったけど、どうも嫌な予感がするんだ」

「どうして？」

「だって、考えてもみろよ。魔法少女は魔女を狩り、グリーンシードを手に入れて穢れを浄化するのが普通だ」

ずっと昔から続いてきた魔法少女の歴史で、すべての少女たちがそうしてきたはずだった。

穢れの癒しなんてのはきつと、キュウベえですら見たことがないだろう。

だから、それは生まれるはずのない、生まれてはいけない能力なんじゃないか。魔法少女と魔女との法則を乱す、禁断の力なのではないか。

と、杏子は言った。

そんな力が今になって突然この世に現れるなんて。

「だから、あたしは思ったんだ。ついさつき、きつとあたしはこれで最期だ、と感じた瞬間に気付いたんだ。魔女がいなくなり、穢れを浄化できなくなった魔法少女はさ……」

——もう、この世に必要な、滅びゆく存在なんじゃないかって……

ふたりの間に、沈黙が流れた。

杏子は魔法少女の歴史について詳しいわけではないが、自分たちの転機が訪れたのではないか、と感じていた。

事実、穢れの溢れた魔法少女は魔女にはならず、円環の理によって安息の世界へと導かれる。

魔法少女が魔女となり、魔女は魔法少女に狩られる時代は終わっていた。

「それが今になって穢れの癒しつてのは、ルール違反なんじゃないかな……つてさ」

「そんな……」

「あはは、勘違いすんなよ。ゆう子のことを責めてるわけじゃないし、いま生きてるあたしもルール違反の共犯さ。だけど、その力は世界を捻じ曲げてしまうかもしれないって

「……」

「……………うん」

「それに、その力はもう使う必要ないかもしれないぞ？　なんとと言っても、佐倉杏子と天生目ゆう子のコンビがいるんだからな」

杏子の口元に、八重歯が覗く笑顔がこぼれた。

「杏子ちゃん」

「だからさ、できるだけあたし達は頑張るんだ。あたし達が正しいと思った道を、踏み外さないように進むんだ。その先にどんな結末があっても、後悔なんてしないように、な」

「私は杏子ちゃんについていくよ」

「いや、ついていくのはあたしさ。ありがとな、ゆう子」

成長著しいゆう子と一緒に、杏子も成長している。

杏子は自分でもわかっていた。

ふたりの間にあるのは、魔法少女の絆と、命の絆と、そして希望の絆。

杏子が差し出した右手に、ゆう子が右手を重ねた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く（第3部

10話）

魔法少女の歴史は古い。

宇宙生命体であるインキュベーターは、有史以前からこの星に干渉し、何千何万もの少女と魔法の契約を交わしてきた。

大昔でいえば、かの有名なクレオパトラ、卑弥呼、ジャンヌダルクといった女性たちも、実は魔法少女だったと言われている。

『彼女たちは、魔法少女の契約を交わしたことで歴史に転機をもたらし、社会を新しいステージへと導いていったの』

ああ、この話はキュウベえからも聞いているよね……と、その声は幼い少女のものだった。

螺良あかねの声が、ほむらの頭の中に直接語りかける。

螺良あかねの姿が、ほむらの目に映る。

あまり長くない髪をツインテールに結んだ、幼い少女の姿。

『そんな大昔からあの宇宙生命体は、この星で宇宙エネルギーの回収を行なってきた。

目減りするエネルギーの補充という名目で、少女たちの希望を絶望に変えてきた』
少女たちは願いを叶える代わりに、魔女と戦う運命を課せられる。

じゃあ……

と、あかねの声はここで一旦途切れ、ほむらの目にひとりの魔法少女を映した。
見たこともない、長い黒髪の少女。

少女はキュウベえと何かを話し、魔法少女となった。

声も、音も、何も聞こえない映像の中でひとり弓矢を構える少女。

やがて少女のソウルジェムは黒く濁り、穢れが溢れ、魔女となった。

『これは、過去すべての魔法少女が歩んできた道。そして……』

今度は、見たこともない長い赤髪の少女が現れた。

少女はキュウベえと何かを話し、魔法少女となった。

声も、音も、何も聞こえない映像の中でひとり槍を振るう少女。

その少女は魔女を殺し、グリーンシードを手に入れた。

そしてグリーンシードで穢れを癒し、少女は因果をつむぐ。

『この子もやがて魔女になり、また新たな魔法少女に狩られる』

そうして、何十人、何百人、何千人という魔法少女が同じことを繰り返し、すべての因果をつむいでいく。

宇宙エネルギーの源として。

『ねえ、考えたことない？ この歴史、この連鎖、このサイクル……ワタシたちは結局、エネルギーの生産源として作られているだけなんだって。あなたもワタシも、ひとつの歯車として回されているだけなんだって』

暁美ほむらという歯車は、ひと際大きく、今この時を回している。

バمامミという歯車は、その役目を終え、朽ちて安息の地へと導かれた。

佐倉杏子と天生目ゆう子の歯車は、ふたつでひとつの歯車となり、力強く回っている。幾重にも連なる歯車は、次に生まれる歯車の為に回っている。

歯車の動力の先には、巨大な時計が時を刻み、その頂点には、宇宙生命体インキュベーターが英知を極めている。

時の刻みを見ているのは、インキュベーターたち。

『ワタシたちは、彼らのために回っている。希望の祈りで回り始め、絶望の呪いで役目を終える。これまで数多の魔法少女たちが繰り返してきたサイクル』

あかねの思考は、ほむらたちのそれを超える、遥か高いところから見ている。

すべてを知り、すべてを悟り、魔法少女とインキュベーターの関係を、その外側から見ている。

『このどこが奇跡なの？ このどこが希望なの？』

永遠につむぐ歯車の先に、永遠にエネルギーを搾取する者たちがいる。

『だから、ワタシはね……』

ほむらの目の前で、すべての歯車が崩壊し、巨大な時計が崩れていった。

『このサイクルを終わらせるの』

ハツと目を開くと、ほむらの前には魔法の顔があった。

『あなたも、幾度もノ時間遡行で見ってきたンデシヨ？ 希望で始マリ、呪いデ終ワル絶望のサイクルを』

『私の記憶を見たわね？』

『ソウ、ワタシはあなたノすべてヲ見てキタ。アナタが繰り返シタ時間の超越、ワルプルギスの夜、ソシテ……円環の理』

魔法はほむらの耳元に顔を寄せ、ほとんどくつつきそうなくらい近くでささやいた。

『アナタはわたしと同じ。運命ニ抗イ、絶望のサイクルを終わラセようとシテいるンデシヨ？ デモね、アナタの方ジャだめナノ』

魔法は最後に、ほむらの左耳に、こう言った。

『円環の理ヲ、消シテはいけナイ』

『よく喋る魔法ね』

ほむらは自分の右頭部に拳銃を向け、引き金を引いた。

銃弾は、停止した時間の中、発射された瞬間に動きを止める。まだ、時は動いていない。

ほむらは頭を少しだけ後ろに引き、八咫の盾の回転を止めた。時間停止の魔法が消え、時が動き出す。

発射された銃弾はほむらの目の前を一瞬で通過し、鈍い音と共に、横にいる魔女の右目を吹き飛ばした。

片目を吹き飛ばされた魔女は、そのまま後ろ向きに倒れ、黒いモヤの中に溶けていった。

「どうやらあなたは、私の魔法の特性をよく知っているようだけど」

ほむらの時間魔法は、ほむら自身に接触している物質にだけ影響する。

発射された銃弾は、ほむらの身体を離れたことで停止した時間の中に放り出され、その動きが止まる。

つまり、ほむらの身体に接している物質は、時間が止まらないのだった。「この黒いモヤも、あなたの身体の一部だったのでしょ」

足元を埋め尽くしている黒いモヤは、常にほむらの両足を覆っていた。

「私の抱える闇とは、うまいことを言ったものね」

『うふふ。さすが、ワルプルギスの夜に挑んだだけあって、強い強い』

どこからともなく聞こえる声は、幼い少女のものだった。

『まあ、そいつは大した魔女じゃないから。魔力も弱いし、力もない。けど、あなたに見せたものがあつただけなの』

やがて、ほむらの部屋を埋め尽くしていた黒いモヤが晴れ、そこには螺旋良あかねが立っていた。

「ついに姿を現したわね」

「初めまして。円環の理に弓引く、時の魔法少女さん。ああ、ワタシは初めましてじゃないんだけどね」

あかねはニヤリと笑みを浮かべた。

そして、

「ここは、ワタシとあなた、ふたりだけで話しましょう。邪魔者には、しばらく消えてもらうね」

と言いきゅうべえに目を向けると、右目から何かが飛び出し、それはきゅうべえをグチャつと吹き飛ばした。

何を撃ち放つたのか見えなかったが、その凄まじい威力で、きゅうべえは無残にはじけてしまった。

肉片が飛び散る、嫌な音がした。

「なっ!? ……どういうつもり?」

「いいじゃない。コイツは生き物っていうより、ただの思考物質。どうせ、そのうちまた湧いてくるでしょ」

インキュベーターを生き物とも思っていない。

「ねえ、時の魔法少女さん。あなた、自分が何をしようとしているかわかっているの?」

「私の頭の中を覗いたなら、わかるでしょ」

「いいえ、わからない。そのバカな考えがわからない」

「本当の彼女を取り戻すのよ。彼女……鹿目まどかは……たつたひとりの私の友達」

「やっぱり何もわかってない」

「あなたにわかってもらう必要はないわ」

あかねは、ふうっつとため息をひとつ吐いた。

「だから教えてあげる。感情に押し潰されて、本当のことを見抜けていないあなたに教えてあげる。円環の理の意味、彼女の存在理由を」

そして語られる真実は、驚くべき内容だった。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

11話）

螺旋あかねは、部屋の中にある半円形のソファの周りを歩き始めた。

ゆつくりと、時計回りに。

そして四角いソファの上にピョンと飛び乗ると、映像を映し出しているディスプレイモニターの1枚を見た。

そこには、ワルプルギスの夜がモノクロに映っている。

「ワルプルギスの夜……ねえ、史上最強の魔女に挑んだ時、どんな気持ちだった？」

「くだらない質問ね」

「恐ろしかった？ 怯えた？ 身がすくむ思いだった？」

「時間の無駄だわ」

「うふふ、クールなんだよね。じゃあ、ここからが本題」

あかねの魔力に反応し、ディスプレイモニターの映像が切り替わった。

映し出されたのは、漆黒のドレスを纏い、天を仰ぐ黒い少女。

あれは、無花果（イチジク）の魔女を消し去り、天生目涼子を救済し、バマミを天（そ

ら)へと導いた、円環の……

「これは、円環の理じゃないよね」

あかねは半身だけほむらに向き、モニタを指さして言った。

「え？」

「正確には、これは鹿目まどかであって、円環の理ではない」

「何を言っているの？ まどかはまどかよ。彼女は私を救うために契約をして……」

「やっぱりね。時の魔法少女さん、あなた勘違いしてるの」

わけがわからなかった。

ほむらには、あかねの言っている意味が理解できなかった。

鹿目まどかであって、円環の理ではない。

鹿目まどかは魔法少女の契約を交わし、ワルプルギスの夜を浄化し、宇宙法則の概念となった。

その概念、つまり円環の理が、魔法少女を魔女化する前に救済する。

これが、ほむらの認識。

ほむらが見てきた世界。

ほむらの中にいる、円環の理。

すなわち、鹿目まどかの存在。

「あなたは何を知っているの？」

鹿目まどかの願いとその存在の終焉を見守り、魔法少女たちの中で唯一、すべての記憶を持って生きているのはほむらだけのはず。

「ワタシはすべてを知っているんだよ」

「私の記憶をのぞき見したのでしょ」

「あなたの記憶はあなたの物。ワタシの記憶とは別物」

あかねはディスプレイモニタをぐるりと眺めた。

ほとんどがワルプルギスの夜に関わる映像なのは、ほむらが当時の戦いに備えた記憶の欠片。

そのひとつひとつを見終わると、最後に漆黒のドレスを纏い、天を仰ぐ黒い少女の姿に向かつて言った。

「こいつは円環の理ではなく、鹿目まどかの意識が具現化した姿。それも真正正銘、本物の魔女だよ。魔法少女の絶望の因果を解き放つ、救済の魔女」

「まどかが魔女？ バカを言わないで」

「ほらね。だから感情に負けているあなたには、本当の彼女が見えていないの。だいた、円環の理は、概念であって存在ではない」

ほむらの方を振り向き、ソファの上からピョンと飛び降りた。

「簡単に言うとなね、円環の理というのは、魔法少女を導く考え方そのもの。そして救済の魔女は、数多の魔法少女たちの呪いを受け止めた、絶望の集合体」

救済の魔女と呼ぶのは、救われる側に都合の良い呼び方。

あの魔女を正しく呼ぶなら、絶望の魔女。

「現在、過去、未来……すべての世界、すべての宇宙、すべての時間軸で絶望を受け止めた彼女が抱える呪いは、どれだけの規模だかわかる？」

——史上最強の魔女と言われた、ワルプルギスの夜？

「いいえ、あんなのは小物。せいぜい、街をひとつふたつ壊す程度の力」

——じゃあ、無限の絶望を抱え続け、バマミと共に救済された、螺良くるみという少女？

「いいえ、あの子は特別だったけど、彼女が抱えた呪いは魔法少女数百人分。せいぜい、国をひとつふたつ壊す程度の力」

あかねは、ひとり問答してみせた。

「絶望の魔女が抱える呪いの規模は、宇宙そのもの。この宇宙すべてを消滅させてしまうほどのエネルギーを抱えている。そんな存在を……あなたは解放とうとしている」

その言葉を聞いて、ほむらは咄嗟に返した。

「嘘……」

「だと思っ？」

あかねの視線に、ほむらは目を逸らした。

ほむらの認識、ほむらが見てきた世界、ほむらの中にいる鹿目まどかの姿が、崩されていった。

「うふふ、わかるでしょ？ 絶望の魔女を開放するということは、彼女の抱えるすべての呪いを開放するということ。そんなことをしたらどうなるか……想像できるでしょ？」

すべての呪いが解放され、世界を覆いつくす。

すべての絶望が希望を飲み込み、この世は暗く閉ざされる。

それはきつと、終末を意味する。

「ワタシの言った意味ががわかるでしょ？ 魔法少女は、この世に終末を告げる悪魔の子。これまで幾人もの魔法少女が辿ってきた運命。あの魔女は、絶望の到達点なんだよ」

救いようがない現実を突きつけられ、ほむらは蒼白になった。

絶望の魔女に対して、ほむらはあまりに無力だった。

——まどかを救う。それが、たった一つだけ最後に残った道しるべ。

ただそれだけの為に、ここまで歩んできた。

運命に抗い、絶望に負けず、希望を力に変えてきた。

しかし、鹿目まどかを救うことは、世界の終わりに繋がる。

「まどか……」

ほむらはうつむいてしまった。

身体力が抜けたように、その場で立ち尽くしてしまった。

「ねえ、鹿目まどかを救えないってわかった今、どんな気持ち？」

「……」

「悲しい？ 苦しい？ それとも絶望？」

「……よ」

「え？ 何？ よく聞こえないよ」

「望むところよ」

ほむらは、冷たく刺すような目で、あかねを見据えた。

「このニセモノの世界は、誰のもの？ この狂った運命は、何のため？」

突然、自分に問いかけるように呟くと、魔力を開放し、全身に紫色の光を纏った。

「悲しみと絶望ばかりを繰り返す救いようなない世界でも、まどかへの想いで希望に変

えられた」

「ふうん……」

「まどかを救うためなら、私はどんな過ちも厭わない」

「世界を滅ぼすことになるよ」

「ええ、構わないわ」

八咫の盾に右手を当て、その縁をツツつと撫でた。

「あなた、狂ってる」

「そうね、私は狂ってる」

盾から自動拳銃のグロック17を取り出すと、カチリと音をたててセーフティレバー

（安全装置）を外した。

「あなたのグリーンシード、私にもらえるかしら」

「うふふ。時の魔法少女さん、凌霄（りょうしゅう）の魔女と同じ顔になってるよ」

あかねが産み出し、ほむらが殺した魔女。

執着心を現す、ノウゼンカズラの花。

まどかへの強い執着は、ほむらの心に凌霄の花を息吹かせた。

「たとえ世界が滅んでも、まどかだけは救ってみせる。彼女が抱えたすべての呪いは、私が受け取ってみせる」

「無理だよ」

「私は、このソウルジェムを懸けてあなたを殺し、グリーンシードを頂くわ」

「それも無理だよ」

「やってみなければ、わからないわ」

そう言っつてほむらは、八咫の盾を廻した。

「さあ、終末へのカウントダウンを始めましょう」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

12話）

盾の内部に魔力が伝わり、内蔵された歯車が高速回転する、ほむらの時間停止魔法。凌霄（りょうしょう）の魔法に対しては、その魔法の性質を見抜かれ効果がなかったが、今度はあかねと接点がない。

今この時は、ほむらだけが動ける時間領域。

「私は、再びまどかと巡り逢う。その為には……」

ほむらは自動拳銃のグロック17を構え、装弾された17発をすべて打ち放った。停止された時の中で発射された弾丸は、銃身のすぐ先で動きを止める。

17発の弾丸と葉莖が空中で停止し、硝煙が視線の先を白く濁した。

「グリーンシールドがもうひとつ必要なのよ」

盾の回転を止め、再び時間が動き出す。

すべての弾は空気を切り裂き、螺旋状に尾を引きながら、あかねに向かって飛んだ。

ほんの数メートルの距離を進む銃弾が、ゆっくりとあかねの身体を貫く。

発砲音と共に、肉体を切り裂く鈍い音がした。

「困った人。これだけ言ってもまだわからないんだ」

声が、銃撃音の反響に重なった。

身体を撃ち抜かれたはずのあかねは、何事もなかったかのように立っている。

銃弾が貫いたと思われる身体の部分に、白い波紋が広がった。

「まどかへの想いは私だけのもの。あなたにわかるはずがないわ」

ほむらは八咫の盾からM249軽機関銃を取り出すと、チャージングハンドル（弾薬を装填するときにかす部品）を引いた。

これは、鳥かごの魔女との戦いに使用した速射型の機関銃。

重量が10キログラムにもなる大きな機関銃を、体重のバランスで支え、トリガーに指をかけた。

「彼女の因果も、絶望も、私が終わらせる」

ためらいもなく引き金を引き、機関銃の一斉射撃を浴びせた。

バラバラララ！

という乾いた銃撃音と共に、数十発の銃弾があかねを撃ち抜いた。

が、着弾した痕は、またしても白い波紋となって、身体の中に吸い込まれていったようだった。

「絶望の魔女と、円環の理はね、等価値なんだよ」

あかねの身体に残った白い弾痕の波紋が、逆流したように外側に流れを変える。

その瞬間、ほむらはなぜかゾクつとした悪寒に襲われ、咄嗟に八咫の盾を廻して時を止めた。

再び、時が止まる。

停止したモノクロな空間の中で見えたのは、白い光を帯びた数発の銃弾が、ほむらに向かってくるどころだった。

一発目は右目のすぐ前で、今まさにほむらの紫紺の目を貫こうとしていた。

他の数発もすべてほむらの身体に向かっている。

ほんの目と鼻の先で、さっきの機関銃の弾丸が、空中に停止している。

「撃たれた弾丸を、そのまま撃ち返している……い！」

今ここで時を止めなければ、気付かぬうちにほむらは撃ち抜かれていた。

そして弾丸を白く光らせているのは、よく見ると魔力の膜だった。

「これが、螺旋あかねの魔法？」

ほむらは魔力を光を帯びた弾に視線を合わせ、

「さっきキュウベえを撃つたのも、これと同じ？ でもあの威力は……」

それから視線の奥にあかねの姿を追うと、そこにはもう誰もいない。

（え？）

時間操作の魔法は、まだ解かれていない。

八咫の盾は歯車を廻し、ほむらの魔力は時間を支配している。

撃ち返された弾丸は宙に浮いているし、部屋の中は色彩を欠いたモノクロな空間だった。

『だから、鹿目まどかを解き放つということは、円環の理を消滅させることになるの』

どこからともなく、あかねの声がテレパシーで伝わってきた。

『円環の理は、魔法少女の時代に終焉を告げるために、彼女の願いで生まれた。もう誰も魔法女にならない、もう誰も絶望に負けない世界の創造神』

「なぜそんなことがわかるの？」

『見ていたからだよ。ワタシは見ていたの。あなたの繰り返した時間遡行も、鹿目まどかの契約も、宇宙再編の出来事も、すべて』

「そんなはずはないわ。だってあれは……」

『ワタシも、時間を操る魔法を持っているんだよ』

螺旋あかねの願いは、すべての悲しみを忘れること。

悲しみを忘れ、絶望を忘れ、痛みを忘れ、穢れに満ちた自分を忘れる。

過去を忘れ、現在（いま）を忘れ、未来を忘れ、時間という概念すら忘れる。

だから時の流れも、あかねにとっては無いに等しい制約だった。

真つ白で無垢な魔力は、無限に染まる、無限の白。
すべてが自由自在。

それが、あかねの能力だった。

『たとえば今、この停止した時間を動かしたらどうなると思う？』

ほむらは目の前に浮いている弾丸を見てハツとした。

八咫の盾に魔力を伝え、時間停止が発動しているのはほむらの魔法。

しかし、その中で言葉を交わしているあかねには、時間停止の魔法が作用していない。

まさか、停止した時間を強制的に動かすなんてことが……

ほむらは慌てて八咫の盾に顔をうずめ、銃弾から身を躲そうとした。

まるで、待っていましたと言わんばかりに時は動き出し、白い魔力を帯びた弾丸は風切り音を立てて走り出す。

バリバリーン！

と、ガラスを割るような音が、響いた。

飛び退いて起き上がったほむらの左腕、八咫の盾が半分に砕けて割れている。

そして、数発の銃弾が砕いたのは、ほむらの盾だけではなく、部屋の壁も粉々にしていた。

およそ機関銃の威力とは思えない銃弾が砕いた壁の外には、見滝原の街ではなく、無

数の星屑が輝く空間が広がっていた。

ほむらの額を、一筋の血が流れた。

八咫の盾を貫通した弾丸が、頭を掠めたようだった。

『時間魔法は、あなただけのものではないんだよ』

ほむらの部屋の外に広がる星の夜空、それはまるで宇宙空間のようだった。

その空間に向かって、部屋の壁、天井、ディスプレイモニタ、ソファやテーブルが、次々と剥ぎ取られていく。

遂にほむらの部屋は、床だけを残し、宇宙に浮かぶ一枚の足場のようになった。

数千、数万と光る星空の中に、白く浮かぶ螺旋あかねがいた。

「これは……結界?」

『そう。ここは円環の理を臨む、絶望の魔法の結界。魔法少女たちに口伝される、安息の地への入り口。涅槃（ねはん）と言って、当たらずとも遠からずつてところかな』

「なぜそんな世界がここに……」

『空間転移だよ。ワタシの魔法で、あなたの部屋ごと移動してきたの』

「空間転移? そんな、時間どころか時空まで飛び越える魔法なんて……」

『見て、あの星屑たちを。あのひとつひとつが、浄化された魔法少女たちの姿なんだよ』

無数の星は、よく見ると様々な色で輝いていた。

赤色、青色、黄色、水色、紫色、緑色、緋色、灰色……

数多の魔法少女が円環の理によって救済され、絶望の因果を断ち切り、星となって宇宙（そら）を埋め尽くしていた。

『こちら側の世界からは、目には見えるけど手は届かない。救済された魔法少女たちの輝きは、円環の理を照らす彼岸の光』

「浄化された魔法少女が、星になっっている？」

『綺麗でしょ。命が尽きても輝いているなんて、まさに奇跡と呼ぶに相応しいと思わない？』

「あなたの話、見えてこないわ」

円環の理と、絶望の魔法の真理を説き、彼岸の光が輝く涅槃へといざなつたあかねが何を考えているのか……ほむらにはわからなかった。

絶望のサイクルを終わらせる、そう言っていたあかねは、何をしようとしているのか。『そろそろ気付いてくれると思っただけど……』

真つ白な光に包まれたあかねは、宙に浮いたままほむらを見下ろして、言葉が続けた。『あの星たちは、魔法少女の抜け殻みたいなもの。穢れのない魂が眠るソウルジェムなんだよ。ワタシは、あの無数のソウルジェムに命を吹き込み、この世に呼び戻す。生命は肉体を構成し、元の魔法少女として甦るの。そして甦った魔法少女たちは、何を思う

かわかる?』

「いい迷惑でしょうね」

『うふふ……皆はきつと、こう思うんだよ』

——こんな運命を背負わせた者を、滅ぼしてやろう、と。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

13話）

たったひとつの奇跡の代償に、魔法少女となる運命を課したのは、他でもないインキュベーター。

あかねは、インキュベーターを呪い、インキュベーターを滅ぼす悪魔を産み出す、と言う。

『自らが作り出した魔法少女に復讐されると知ったら、どんな気持ちになるだろうね』

「あなたの復讐に、すべての魔法少女を巻き込もうと言うのね」

『ワタシだってその気になれば、星のひとつつたつを滅ぼす力があるの。でもね、ワタシがやるだけじゃ面白くないでしょ？ それにあなただって、魔法少女になったからこんな目に遭ってるんだよ。ワタシたちを悪魔の子にしたあいつらを、憎いと思わない？』

あのウジムシみたいな連中に、抗うことができな絶望を与えてやりたいと思わない？』

「あなたも、狂ってるわ」

『だから言ったでしょ、同じ匂いがするんだよ』

ほむらが持つ鹿目まどかへの想いは、誰にも止められない歪んだ愛情。

そしてあかねが持つインキュベーターへの復讐心も、誰にも止められない澱んだ憎悪。

互いが求める結末は、それぞれの正義であり、ベクトルの違う狂気だった。

『時の魔法少女さん、そして赤い魔法少女さん、それと……無花果（イチジク）の魔法少女さん。あなたたち3人が、この世で最後の魔法少女。3つのソウルジェムを彼岸の光に加えたら、ワタシはすべての魔力を解き放つ。そして物語は始まりを迎えるの』

あかねは閃光と共に真っ白なシルエットとなった。

無限に染まる、無限の白。

それは魔法少女としての、あかねの姿。

「いいえ、始まりはないわ。これが物語の終わり」

ほむらは漆黒の弓を手に取り、淡くピンク色に発光する矢を掲げた。

すべての魔力を集約し、すべてを滅する弓矢。

ほむらの最大にして最後の魔法。

「螺良あかね、あなたの気持ちはわかるわ。私たち魔法少女は、奇跡の代わりに大事なものをたくさん失ってしまった」

『そう。大切な思い出も、生きる素晴らしさも、希望の未来も』

あかねの身体に、白い稲妻が巻き始めた。

胎動するように魔力の鼓動を鳴らし、空間が揺れる。

すると、背中に繊細な羽根が1枚1枚伸びてゆき、神々しくも禍々しい翼を広げた。

「叶えた願いの代償は、あまりに大きい。呪われた魔法少女の因果は、抗うことができない絶望の歯車かもしれない」

『だからワタシは、絶望のサイクルを終わらせるの』

ほむらは漆黒の弓に矢を番え、ゆつくりと弦を引き、キリキリと引き絞った。

ピンク色の光が、魔法の矢を染めている。

「いいえ、それは間違ってる。絶望のサイクルを終わらせるのではなく、また始めようとしていただけよ」

『いいえ、正しいのはワタシ。因果は応報するんだよ』

「相容れないわね、私たち。同じ魔法少女だというのに」

『仕方ないよ、ワタシとあなたは目に映るものが違うから』

「そうね。ふたりとも、未来が見えていない」

『始まらない未来と、終わらない未来？』

「幸せな未来が、よ」

『……』

「……」

ふたりの会話は、ここで途切れた。

あとは、沈黙だった。

数多の星が輝く空間で、ほんの刹那、ほんの数秒、指折るほども数えない、時間とも呼べない時間が流れる。

ほむらは、まどかを救うため。

あかねは、インキュベーターへの復讐のため。

互いの正義と思想は決して交わらない。

もはや勝ち負けもない、生死もない、未来もない戦い。

その瞬間は、決して相容れないふたりの、寸分の狂いもないタイミングで始まった。

ほむらが矢を番えた右手を離す。

矢は弓弦を従え、弓のしなりで加速する。

淡い発光を引きながら、中仕掛（矢を番える部分）を弾いて押し出された。

あかねは表情（かお）もないまま白い翼をうしろにはためかせ、頭からほむらに向かって飛んだ。

小さな右手を振りかぶり、その手で矢を弾き返そうとでもするように前に突き出す。

まばたきする間も無いまま、魔法の矢とあかねの右手が衝突した。

矢は螺旋に巻きながら、あかねの右手の前に一瞬止まったかに見えた。

が、渦巻くような美しい軌道に、あかねの右半身をえぐり取るように飲み込み、その無垢な身体を貫いた。

矢はピンク色の尾を引きながら、星屑の空間を越えていった。

「その弓……」

あかねの右半身が、身体の3分の1ほど消し飛ばされている。

千切れるというよりも、剥ぎ取るといっても、矢の軌道に巻き取られたように失われていた。

「それは、終局（アルティメット）の弓……鹿目まどかの物、だね」

「そう。あらゆる魔力を消滅させる、まどかと私の魔法よ」

「あなたの魔力でそんなことができるなんて」

「相手の魔力が強ければ強いほど、この矢は威力を發揮するみたいね」

身体の損壊が激しいあかねは、フラフラと下りてきた。

消し飛んだ右半身を庇いながら、力なくほむらの前に足をつけた。

真っ白なシルエットの魔法少女は解け、幼い少女の姿に戻る。

もともとの小さな身体が、より小さく感じられた。

「身体が、再生されない」

あかねは、消し飛んだ半身の修復ができないようだった。

赤くえぐれた傷口からは血液が流れることなく、今まであったものがただ無くなっている……そんな自分を不思議そうに眺めていた。

それから、片方だけ残った翼を、ゆつたりと足元に垂らした。

「痛い」

顔を伏せ、かすれる声を漏らした。

「痛いよ」

もう一度、眩いた。

「ワタシ、死ぬの？」

「ソウルジエムがある限り、死ぬことはないわ。でも、その身体はもう修復されない。苦痛の生よりも、安息の導きを選びなさい」

痛みを忘れ、絶望を忘れ、穢れを忘れる力を断ち切れば、ソウルジエムはたちまち黒く染まる。

穢れの解放が始まれば、円環の理によつて安息の世界へ導かれる。

あかねが救われる道は、ただひとつ。

「嫌だよ。ワタシ、死にたくないよ」

「破壊と復讐を望んだあなたが言うべきセリフではないわ」

「ワタシはただ、忘れたかったただけなのに。辛い事も、悲しい事も、全部忘れたかっただけなのに……」

あかねはガクつと膝をつき、戦う気も失くしたように、無防備な姿をさらした。

そして残った左手に、真っ白なソウルジェムを取り出すと

「ああ……何もかも忘れてしまいたい。この痛みも、運命も、自分自身でさえも……」

自らの魂の宝珠に、そう告げた。

ソウルジェムは深い白色に輝き、あかねの瞳を照らした。

「何もかも忘れて、何もかも壊してしまいたい。この世界も、あなたの希望も、ワタシの未来も……」

「ま、待ちなさいー！」

ほむらは慌てて声を出した。

今ここで、初めてあかねの性質に気付いた。

あかねは自分の意思で、自分の魂をコントロールしている。

自分の言葉で、すべての不可能を可能にしている。

悲しみの忘却も、呪いの吐出も、魔法の創造も、時間の制約も。

ソウルジェム、それは魔法少女の魂であり、魔力の源。

その魂に意思を添え、己の魔力に転換する。

ということとは、

その意思

その願い

何もかもを忘れて、何もかもを壊したいという言葉

「あなた……自我を捨てる気ね」

あかねの白いソウルジエムが、パキンという音を立ててひび割れた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

14話）

螺良あかねは、すべてを可能にする魂のコントロールと、自我を捨てる。

そこは意思ある生き物が堕ちる、最後の場所。

「あなた、それは……魔獣と同じ」

涅槃の空間に、もう子供の姿ではない螺良あかねがいた。

魔法少女でもない、魔女でもない、人の姿をしているが、人と呼べる姿ではない。

白く細い身体で、スラリと立ち上がった。

（失った右半身が、再生していない）

ほむらの矢でえぐられた部分は、再生していなかった。

右肩から脇腹にかけて失った身体はそのまま、片側だけ広がる翼は先程よりも大き

く、さらに禍々しい。

何よりも恐ろしいのは、その表情だった。

顔は大人びた女性そのものだが、目が氷のように冷たい。

薄く開けたふたつの眼（まなこ）……

冷え切ったその目は、一体何が見えているのか。

「最初からこうすればよかったのかな」

声は、あかねの幼い声そのままだった。

「希望とか絶望とか、祈りとか呪いとか、そんなことは、もうどうでもいい」

丈の長い真つ白いドレスで、股下が大きく割れ、鳥の羽のように後ろになびかせている格好。

胸元、肩、腰の部分は色白な肌が露出している。

白と薄いグレーのハリキンチュック（菱形模様）のようなタイツで足を包み、白いアルパルガータ（足の甲から足首の上まで紐で結んだ靴）を履いている。

髪の毛だけは黒だったが、身体のすべてが何から何まで真つ白な、純白で無垢な姿。

白は純粹で神聖なイメージがある。

清純で正義なイメージがある。

が、あかねの瞳は希薄で冷淡、そして空虚に虚無にほむらを見ていた。

それはまるで、白い悪魔だった。

「あなたの言ったとおり、ワタシたちに幸せな未来なんて、どこにもないんだね」

ほむらに言っているのか、自分自身に言っているのか、誰か他の者に言っているかわからないが、あかねの言葉は何もかもを諦めているように聞こえた。

そのまま、ソウルジェムが輝く星空を見上げてから、冷たい目線だけをほむらに向け
る。

殺気、というよりも、その視線から強烈な恐怖を覚えて、ほむらは思わず身構えた。

あの目からは、感情が見えない。

あかねは無言で左手を空に向けた。

掌を広げ、遙か頭上のソウルジェムを掴むように。

すると、いくつかのジェムがチラチラとまたたき、暗い空からほむらの前に落ちてき
た。

落ちてきたのは、小さなソウルジェムではなく、黒い少女。

胸元だけにカラーを持つ、真っ黒なシルエットの少女。

黄色、緑色、藍色、水色……様々な色に輝く、魂の宝珠を胸の中に埋め込んだ、影の
ような少女。

「まさか……本当にソウルジェムに生命を吹き込んだの？」

黒い少女たちは、大きな剣や、槍や、杖、薙刀など、黒い固有の武器を手に、ほむら
を取り囲んだ。

「や、やめて」

背丈恰好はほむらと同じくらいの少女たちが、一斉にほむらに襲いかかった。

ほむらには、銃火器と終局の弓矢以外に武器がない。

破損した八咫の盾は四次元収納の効力を失い、銃火器を取り出すことはできなかった。

終局の弓も、今のほむらの魔力ではもう使うことができない。

いや、それよりも

「やめて……」

黒い少女たちの攻撃をギリギリかわし、半分に割れた八咫の盾で刃を受け止め、それでもほむらは反撃できずにいた。

ソウルジエムを宿している少女たちは、魔法少女なのではないか。

彼女たちの中に輝く魂の宝珠、あれを砕くことは、彼女たちに再び死を与えてしまうのではないか。

「なんて、なんて残酷なことをするの?」

大きな薙刀がほむらの背後を襲い、鋭利な刃が背中を浅く切り裂く。

正面からは長い杖の殴打が、強烈な一撃で八咫の盾を砕いた。

黒い魔法少女たちの、ひとりひとりの強さはほむらには到底及ばない。

が、武器も持たず、反撃もしないほむらには、繰り返される波状攻撃を防ぐ手立てはなかった。

砕けた八咫の盾では、時の魔法も使えない。

「あなたたちの魂は、過去に救われたはずよ。なぜまた、呪いの道に踏み出そうとするの？」

ほむらの問いかけに、魔法少女たちは一瞬動きを止めたように見えたが、すぐに藍色の少女が大きな剣で薙ぎ払ってきた。

間一髪で空中に逃れたが、今度は緑色の少女が槍を振り下ろし、長い柄がほむらの腰のあたりを激しく叩き伏せる。

「うぐっ！」

という苦し気な声と共に、ほむらは床面に落下した。

辛うじて態勢を整えて着地し、追撃を防ごうと空を見上げたところに、今度は水色の少女が杖を振りかぶった。

ほむらが見たのは、振り下ろされる杖と、それを持つ少女の目から流れる一筋の涙。

硬い杖の殴打で、鈍い音が響いた。

そこへ他の黒い少女たちが舞い降り、次々と武器を振り下ろす。

切り裂く音、叩きつける音……ほむらの身体を壊す、グチャグチャと生々しい音が、何度も何度も響いた。

「紫色の、時の魔法少女さん。あなたも星になるんだよ。涅槃を照らす光に」

あかねは空を見上げたまま、そう言った。

黒い少女たちが、黙って手を止める。

その足元には、朱に染った、暁美ほむらの無残な姿があった。

ほむらはピクリとも動かず、息をしているのかもわからない。

左手の甲にあるソウルジェムは、黒い影を揺らめかせていた。

「残りのふたりも、一緒にね」

あかねは、黒い少女たちに囲まれ、ボロ雑巾のように横たわるほむらの向こうを見た。
言った。

そこには、ふたりの魔法少女が、今まさに空間を飛び越えて来たところだった。

「ここは一体?」

「ほ、ほむらさん!」

赤いローブ姿の魔法少女と、赤紫色の燕尾服の魔法少女。

佐倉杏子と天生目ゆう子が瞬間移動で辿り着いたのは、ほむらの部屋ではなく、この涅槃の空間だった。

「おい、これはアンタらの仕業なのか?」

杏子はズタズタになったほむらの姿を見ると、影の少女をギラッと睨んだ。

それぞれが手に持つ黒い武器から、ほむらのおもわれる鮮血が、ポタリ……ポタリ

……と垂れ落ちていた。

杏子は、それを見るとすぐに赤い槍を構え、八重歯を剥きだして突進した。頭の上でクルクルと槍を旋回させ、黒い少女たちを一気に薙ぎ払う。

黒い少女たちは一斉に飛び上がり、杏子の攻撃から空中に逃れた。

藍色のジエムを秘めた少女だけが大剣で受け止めるが、杏子の一撃は大剣を真つ二つに折り、そのまま黒い身体を吹っ飛ばした。

真つ黒で影のような身体は脆く引き千切れ、空間の中に溶けるように消えてしまった。

カラカラと、何かが転がる音がした。

杏子は足元のほむらに視線だけを向け

「ゆう子！」

後ろを振り向くことなく、ゆう子を呼んだ。

「大丈夫だ、まだ生きてる。傷を癒してやってくれないか」

「うん」

ゆう子は足を踏み出すことなく瞬間移動でほむらの傍らに寄り、そこにしゃがみ込むと、魔力を開放して癒しの魔法を当てた。

出血はすぐに治まり、みるみる傷が癒えていく。

ゆう子の癒し魔法は、ほむらの身体を完全に回復させた。
が、

「杏子ちゃん」

ほむらのソウルジェムは、黒い揺らめきが色濃く漂っている。

「ほむらさんのソウルジェムが……」

紫色のジェムは、先程の杏子の物と同じように、穢れの澱を滲ませていた。

「ちっ、もう最後の魔力を使っちゃまったのか？」

ほむらに委ねたはずの、螺良あかねを仕留める最後の手段。

無花果の魔獣を一瞬で消し去った、ほむら最強の魔法。

「え？ それを……もう、使ったのか？」

杏子は、宙に浮く黒い少女たちから視線を落とし、半身を削られている人の姿を捉えた。

片側だけ大きな翼を生やし、こちらを見つめる真っ白な姿。

「また会ったね、赤い魔法少女さん」

その声に、杏子は目を見開き戦慄した。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

15話）

「コイツまさか、あの……ちびっ子なのか?」

杏子の脳裏に、螺旋階段での出来事が蘇った。

自らの槍を突き刺され、瀕死に陥った白い影との戦い。

胸元にあるソウルジエムを狙われて死を覚悟した杏子は、最後の「賭け」で変身を解いた。

肉体を引き裂かれても、ジエムが無事なら死ぬことはない。

身体の損傷と痛みはガマンして、ソウルジエムを守った。

「赤い魔法少女さん、生きてたんだね。あの時、ソウルジエムを砕いたはずなのに」

「へっ、アンタなんか殺されてたまるかっての」

「ふうん……」

「しかし、アンタのその身体、ずいぶんと変わり果てたもんだな」

失っている半身は、ほむらの光の矢でやられたものだ、と杏子は思った。

あれだけ強い魔力を秘めている螺旋あかねに、あんな深手を負わせることができるの

は、ほむらの力でなければ成せないはずだ、と思った。

ということとは、ほむらがもう一度、あの弓矢を使うことができれば……

「ワタシのこと？」

「そうさ、あたしとやり合った時は、そんなんじやなかった」

杏子はそう言いながら、ゆう子にテレパシーを送った。

『ゆう子、聞こえるか？ ゆう子』

『杏子ちゃん？ うん、聞こえてるよ』

「一体、何があつたんだい？」

テレパシーを送りながらも、あかねと会話を続ける。

『さっきの話は一旦ナシだ。もう一度だけ、お前の力を借りたい』

『私の、魔法だね』

『ああ。ほむらのソウルジェムを、癒してやってくれ』

「何って、これがワタシの本当の姿」

「え？（コイツ、何を言ってるんだ？）」

「忘れたの？ ワタシも、『まだ』魔法少女なんだよ。これがワタシの本当の姿」

「ここまでのふたりの話は、噛み合っていなかった。

杏子は、半身を失っている訳を尋ねていたが、あかねは『若い少女の姿ではない理由』

を答えていた。

そしてあかねは、特殊な魔力を解き放っているゆう子を見ていた。

ほむらのソウルジェムに小さな魔法陣を当てて黒い結晶を取り出し、癒しの魔法の反作用で穢れの結晶を浄化させる。

ほむらはすぐに気付いき、目を開けると、上半身を起こした。

「へえ、面白い魔法を使うんだね」

「なに？」

『言っただでしょ。ワタシも、まだ魔法少女なの』

あかねは口を開かぬまま、杏子にテレパシーを送った。

「しまったー！」

あかねに向き合う杏子の横を、一筋の白い光線が通り抜けた。

光の線は、あかねの指先から杏子の横をすり抜けていく。

「魔法で穢れを浄化するなんて、初めて見せてもらったよ」

あまりに一瞬の出来事で、その光が何なのかは見えなかったが、何が起こったのははすぐに理解した。

白い光の行く先は、ゆう子の左耳。

そこにあるのは、魔法少女の魂の宝珠。

ゆう子が左耳につける、イヤリング型の、赤紫色のソウルジエム。

「でも……それはルール違反だね」

ゆう子のソウルジエムに、白い羽根が突き刺さっていた。

ほむらの穢れを浄化したゆう子は、その光に気付かぬまま、何が起きたのかすらわからぬまま、何かに気付いたのは、自分のソウルジエムが碎ける音だった。

パキーン

という音と共に、赤紫色のソウルジエムは綺麗に碎けた。

意識を失いながら目を閉じていくゆう子の視界に、ジエムの細かい破片が少しだけ映った。

「なっ!?!」

ソウルジエムは、魔法少女の命。

外付けのハードウェアである肉体がどんなに傷付いても、魔力で修復すれば死ぬことはないが、ソウルジエムを碎かれれば魔法少女は死ぬ。

生命の鼓動は直ちに停止し、身体は活動を止め、魂は朽ち果てる。

ゆう子は、崩れ落ちるようにその場に倒れ込んだ。

ドサツと身体が倒れる音と、ゴツンと頭を打ち付ける音が、ほとんど同時に聞こえた。

その光景を、ほむらもすぐ傍で見ている。

ほむらの傍らには、まるで眠っているようなゆう子と、砕けたソウルジェムと、白い羽根。

「息を、していない……」

ほむらは、その横たわった身体に触れてすぐにわかった。

ゆう子の身体は、完全に生命活動を停止している。

息はない。

脈もない。

ソウルジェムは見事に砕け、天生目ゆう子は確実に死んでいた。

「デメエ……！」

杏子は八重歯を剥きだし、目を尖らせ、身体を震わせながら、腹の底から声を振り絞った。

眉間に電光が走るようにあかねを睨みつけ

「許さねえ!!」

ダツと足元を蹴り、一足飛びであかねの正面から槍を振り下ろした。

凄まじい殺気。

裂はくの気合を込めた、憤怒の一撃。

ガキーン!

という金属音で杏子の槍は止まった。

あかねが立てた左手の人差し指一本で、その槍は止まった。

あかねは、その槍の穂を指先ひとつで受け止めていた。

「クソッ！」

杏子はすぐに槍を引き、身体を捻って横なぎに薙ぎ払った。

狙うのは、半身を削られているあかねの右側。

槍の遠心力と、杏子の身体の捻りで、さつきよりも速い、さつきよりも強力な二撃目。

しかし、これも激しい金属音であかねの左手に捌かれる。

三撃目、四撃目と、突く、振り上げる攻撃も、同じように弾かれてしまった。

「無駄だよ、そんなんじやワタシは殺せない」

氷のように冷たい目で、あかねは言った。

「うるせえ！ あたしは怒った！ テメエは絶対に許さねえ!!」

杏子は怒りを全面に表した。

目は怒りに燃え、顔は紅潮し、声は怒気を発する。

全身を躍動させ、目にも止まらぬ槍捌きで、振り下ろす、薙ぎ払う、突く、振り上げるコンビネーション攻撃を繰り返した。

槍の穂に赤い光を纏いながら、怒涛の波状攻撃をあかねに見舞う。

一撃一撃の槍の攻撃が、いくつもの赤い光の弧を描いてみせた。
が

あかねはそのすべての攻撃を、冷めた表情で難なく防いでいた。

「ワタシの相手はあなたじゃない。あなたの相手はこっちだよ」

あかねの言葉に反応してか、影の魔法少女たちが舞い降りてきた。

真つ先に仕掛けてきたのは、薙刀の少女。

上空から大きな刃を杏子の頭上に振り下ろした。

杏子はそれを目で見ることもなく槍で受け止め

「邪魔すんじゃねえ！」

と怒鳴り、返す刃で薙刀の少女を一刀両断にした。

続けて槍の少女と杖の少女が同時に迫ったが、これも杏子の一閃で塵と消えてしまった。

「うふふ、やつぱりあなたは強い。でも、これはどう？」

あかねは再び左手の掌を天にかざし、涅槃の空に星を掴んだ。

暗い空にジエムがまたたき、輝く雨のように、流星群のように、次々と降り注ぐ。

そのひとつひとつが肉体を形成し、数えきれないほどの影の少女が降り立った。

「コイツらは何なんだ!?! 使い魔なのか?」

「この子たちは魔法少女。過去に力を使い果たし、円環の理によつて導かれた魔法少女たちを、ワタシの魔力で蘇らせているの」

「なんだって!?!」

杏子は影の少女たちを見つめた。

そのひとりひとりの身体には、魔法少女のカラーを表す光が宿っている。

「テメエは……自分が何をしてるかわかっくんのか!?!」

「何つて、あなたも気付いているんでしょ? もう魔法少女は、この世に必要ないんだつて」

あかねの合図で、影の少女たちは一斉に杏子に向かってきた。

そこに彼女らの意思などなく、ただ操り人形のように、各々の武器を振りかざす。

「だから、最後は殺し合えばいいんだよ。魔法少女が魔女を殺してきたようにね」

「ぎけんじゃねえ! 他人の生命を操つて殺し合いをさせようなんて、テメエは魔女よりよっぽどタチが悪いぜ」

襲いかかる幾重もの波状攻撃を、槍一本で防ぎながら杏子は叫んだ。

たつたひとりの杏子を相手に、何十何百もの少女が迫るが、それらをいとも簡単に弾き返していた。

(コイツら大して強くないけど、ソウルジエムを砕いたら殺しちゃうってことか?)

槍を旋回させ、向かってくる武器だけを弾き返す。

これだけたくさんの相手に一斉攻撃をされても、杏子はかすり傷ひとつ負うことはなかった。

それだけ杏子の強さは群を抜いていた。

しかし……

その中にひとり、杏子の身知った少女がいた。

大きなマントを広げた、剣士のような姿。

片側が長い斜めラインのスカート。

後ろ髪が斜めにカットされたアシンメトリーな髪型。

その影の少女は、バサッとマントをなびかせると、両手にサーベルのような剣を構えた。

「……さやか！」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く (第3部

16話)

「美樹……さやか……」

ほむらの目にも映る、その少女の姿。

両手に武器を持つそのシルエット、マントをなびかせるそのフォルム、背格好も何もかもが、美樹さやかそのものだった。

「さやか……さやかなのか？」

杏子はこれまでの殺気を脱ぎ捨て、動揺していた。

いま目の前にいるのは、世界改変の後に円環の理によって消滅した美樹さやかの影。もう二度と会うことが叶わぬはずだった、仲間の姿。

「どうして、こんなところに……」

「ああ、あなたの知ってる子だったんだね」

両手をダラリと垂らした影のさやかの向こうで、あかねが言った。

相変わらず冷たい視線のまま、しかし、どこかうすら笑みを浮かべたような口元で。

(残酷すぎる。とても人の考えることと思えない)

ほむらは立ちあがり、凄惨な想いであかねを見た。

この白い悪魔は、ためらいもなくゆう子を殺し、何百人もの魔法少女の魂を弄んでい
る。

（でも螺良あかねは、まだソウルジエムを捨てていない。だから、魔獣になどなってい
ない）

そういえば、あかねは言っていた。

自分は『まだ魔法少女だ』と。

そして、あかねはテレパシーを使っていた。

やはり、『まだ魔法少女』なのだ。

「（でも、あの所業……）心はずでに、獣」

さやかは無言で剣を構えると、凄まじい速さで杏子に突っ込んだ。

双剣を躍らせ、杏子に斬りかかる。

刃を当て引くような斬撃は、明らかに杏子を殺す攻撃だった。

あれで斬られればひとたまりもない。

杏子は防戦一方で、さやかの攻撃を槍で受けるだけだった。

「さやか、どうしちゃったんだよー！」

戦意は喪失し、心は乱れている。

それもそのはず。

杏子とさやかは、心許せる仲だった。

ふたりの間には、強い絆があった。

かつて、錆び付いた心で彷徨っていた杏子に、帰る場所を教えてくれた。

崩れてしまいそうな毎日でも、笑って見つめ合えた。

いつだって変わらない思いを残せたのは、美樹さやかがいたから。

だから杏子は、さやかに刃を向けることはできなかつた。

「さやか、やめてくれよ、さやかー」

杏子は、繰り返しされる斬撃を必死で受けるだけだった。

ただ呼び続けることしかできなくなっていた。

ふたりの強さは、どちらかといえば杏子のほうが上だった。

魔法少女としての経験とセンス、場数も段違いに杏子が上。

何よりもさやかは、攻撃能力よりも治癒能力に長けた魔法少女で、杏子のように幻惑魔法と槍を一体化させた攻撃型の魔法少女ではない。

それでも、さよかの攻撃は杏子を圧倒していた。

杏子は防戦一方なうえに、心は乱れ、さやかを傷付けることはできない。

もしソウルジェムに攻撃を当ててしまえば、殺してしまうことになる。

ふたりの壮絶な攻防に、他の影の少女たちは割り込む隙もなかった。

激しい剣戟の衝突で、小さな火花が飛び散る。

槍の柄にギリギリという音を乗せながら双剣を受け止めた時、ふたりの目が合った

……ような気がした。

「さやか……泣いて、いるのか？」

影の顔には、涙がつたっていた。

「そうだよな、せつかくの再会が、こんなんじや……な」

杏子は目を伏せ、口元を歪めた。

「さやか、お前……あのとき言ってたよな。あたし達の力は、人を幸せにできるって」

影の少女は答えないが、杏子は言葉を繋げる。

「そうさ。それを信じて、魔法少女になったんだもん。アンタも……あたしも」

杏子は渾身の力を込めて、さやかの身体ごと双剣を押し返した。

影のさやかは空中でクルクルと回転してから着地する。

そうして、ふたりの間には距離が取られた。

「だから、あたしは今でも信じてるんだ。それが、不確かな未来でも……さ」

杏子はゆっくりと腕を下ろし、身体の力を抜くと、足元に槍を落とした。

無造作に、無防備に。

そこへさやかか突進してきた。

正面に双剣を交差させ、一瞬で間合いを詰める。

「なあ……目え覚ましなよ、さやか」

杏子は無抵抗のままだった。

そこに、真つ黒な剣が水平にクロスし、首の付け根にふたつの刃が交差する。

——アンタの帰る場所は、ここじゃない

その言葉に、さやかはピタリと動きを止めた。

影のサーベルは、首の表皮に一文字の赤い線を描いて止まった。

交差した双剣は、杏子の首を刎ねることなく、皮一枚に薄い傷をつけただけだった。

そのまま、さやかは動かずにいた。

首の両側をサーベルで挟まれたまま、杏子も動かずにいた。

まるで、時が止まっているように。

薄く斬られた杏子の首筋に、赤い血がゆっくりと流れた。

「あたし達の場所に帰ろう、さやか」

そのひとりで、さやかは両手に持つサーベルを下ろした。

杏子の声が届いたのか、記憶を呼び戻したのか、もう殺意は感じられない。

表情（かお）もない影の顔が、なんとなく笑っているようにも見えた。

その時だった。

「……………何?」

ほむらは足元に違和感を覚えた。

杏子とさやかかの攻防の中、自分の足元を見ている暇はなかったのだが、ふと何かが動いているような、息吹いているような、生命の鼓動を感じて視線を落とした。

そこにはソウルジェムを砕かれ、天生目ゆう子が息絶えている。

赤紫色の燕尾服に包まれ、眠るように横たわるゆう子の身体ではなく、その周り。

「ハ、これは?」

小さな何かが、動いた。

それは緑色の葉を出し、今まさに芽吹いたところだった。

「植物? これは……………樹木の芽?」

砕けたソウルジェムの破片のひとつひとつから、緑色の芽を出し、葉を広げ、苗木のように樹木の芽が伸びていた。

そのエネルギーというか、魔力の波動というか、大気に満ちていく生命の鼓動を感じて、杏子も影の少女たちもが一斉に目を向けた。

「な、なんだ? このとんでもない魔力は?」

少し離れた杏子には、ほむらの足元に芽吹く『何か』は見えていない。

ただ、そこから発せられるとてつもない魔力の波動が、魔法少女の第六感を揺さぶった。

「ほむら、お前一体何を？」

「いいえ、私ではないわ。これは……無花果の樹？」

深く5裂して裂片の先端が丸みを帯びた葉。

若葉色のような、薄い褐色のような枝。

それらはゆう子の亡骸を持ち上げながら物凄い早さで伸びていき、ねじれ交わるように絡み合い、ひとつの大きな樹木へと姿を成した。

いくつもの根がしっかりと地を這い、太い幹は力強く、大きな枝にはたくさんの葉が茂っている。

突如現れた巨木を前に、誰もが言葉を失っていた。

あかねは、目の前で起こったことが自分と関わりのないことだとわかっていたが、冷たい視線を向けているだけだった。

見上げるほどの大樹の出現で、涅槃の空間は殺伐とした戦いの空気から不思議な雰囲気包まれた。

神妙で、奇怪で、異様な感じ。

「これは、あの時と同じ……？」

その光景は、あのとき六千石町で起こったグリーンフシードの転生と酷似していた。ゆう子のソウルジェムが、再び生まれ変わろうとしているのか。

続く

魔法少女まどか☆マジカ 別編く再臨の物語く（第3部 17話）

無花果の大樹の中心は、あの時と同じく中心部分が空洞になっていて、その中から赤紫色の光を放っていた。

「あの光は、ゆう子のソウルジエムなのか？」

光の中に、ゆう子の身体が見えた。

そして、その身体を包み込むように、ゆう子の後ろにもうひとり、少女の姿があった。

「あれは……」

どこことなく、ゆう子と面影の重なるような少女が、優しく抱きかかえている。

産まれたままの姿で、いたわるように、慈しむように、ゆう子の後ろから両手を回していた。

「天生目……涼子」

「え？ あれがゆう子の、お姉さん？」

ほむらは思い出した。

夜の浜辺で円環の理に導かれ、ほむらが看取った魔法少女。

ゆう子の実姉、天生目涼子の姿。

『ゆう子、大きくなったんだな……強くなったんだな……』

「声が！」

涼子の優しい声が聞こえてきた。

魔法少女のテレパシー、心の声が、皆の頭の中に聞こえてきた。

『私のソウルジェムを継いで魔法少女になつていたのか。また辛い思いをさせてしまったんだね』

——ゴメンな、ゆう子。

——ありがとう、ゆう子。

涼子は、ひとり語りかける。

目を閉じ、力尽きたゆう子に優しく語りかける。

『そうか、友達を助けるために、自分の力で走つていたんだね』

ほむらや杏子には、涼子の声だけが聞こえているが、そこには姉妹の会話が交わされているのか、涼子はまるでゆう子の話を聞いているように続けた。

『大丈夫だよ。割れてしまったソウルジェムは、元々はお姉ちゃんのものだ。ゆう子の魂は、まだ死んじやいないよ。そうだろう？ キユウベえ』

涼子はそう言つて、大樹の根元を見た。

そこには、どこから来たのか、いつからいたのか、魔法の使者であるキュウベえが姿を見せた。

「天生目涼子、久しぶりだね」

「キュウベえ！」

ほむらも、その場の誰も、キュウベえが姿を現したことに気付いていなかった。

あかねに殺されたはずのキュウベえは、いつもと変わらず飄々と、小さな身体に大きな尻尾を振りながら大樹を見上げていた。

『この子の肉体は死んでしまったけど、魂はまだ生きている……でしよ？』

涼子はテレパシーで問いかけた。

「そうだね。彼女は願いを叶えて魔法少女になったけど、そういえば『彼女自身のソウルジェムは産み出されていない』んだっただね」

『私のソウルジェムで代用した魔法少女だったんだ。ならばもう一度、ゆう子自身のソウルジェムを輝かせれば、魔法少女として蘇ることは可能なんだろう？』

「まあ、理論上はね。でも、願いを2度も叶えるのはルール違反だね」

『いいじゃないか。よくある『イレギュラー』ってやつだよ』

「やれやれ、君には敵わないよ。でも、早くした方がいいね。君に呼ばれて来たのはいいけど、僕という個体も長生きできなそうだ」

キュウベえはそう言つて、後ろを振り返つた。

ほむらの先、杏子とさやかかの向こう側。

翼の折れた白い悪魔、螺旋あかねがキュウベえを鋭く見ている。

「インキュベーター……!」

あかねの眼は、さつきまでの冷たい視線から一変して憎悪に燃えている。

当初の目的、インキュベーターへの復讐は忘れていないようだった。

「おっと、そうはさせねえ!」

杏子は槍を掴み、すぐさまあかねに向かって躍り出た。

ほむらも魔力で八咫の盾を修復すると、M249軽機関銃を取り出した。

「ほむら! ソウルジェムを撃つんじゃないぞ!」

「あなたに言われなくてもわかっているわ!」

杏子があかねに槍を振り下ろすと、影の少女たちが動き出した。

あかねの意思で操られているのか、ただし影の少女たちは全員が動くのではなく、一部の少女だけが杏子に向かって攻撃を仕掛けた。

杏子があかねを足止めし、ほむらは影の少女を足止めする。

「あつちは任せよう。あたしたちは、あたしたちのやれることをやるだけだ!」

光明を見出した杏子は、動きが軽い。

相変わらず、繰り出す槍はあかねに弾かれてしまうが、八重歯をこぼした笑みがそれを証明していた。

(ゆう子は生きてる。あとはコイツを何とかすれば……)

杏子は、背後から迫る影の少女たちを気にすることなく、全力であかねに攻撃を向けた。

空から飛来する影の少女たちは、ほむらが機関銃で撃ち抜く。

ソウルジエムを破壊してしまうことなく、正確な狙いで影の身体に銃撃を浴びせると、肉体を破壊された少女たちは空っぽのソウルジエムを残して消滅していった。

ふたりのコンビネーションも、近距離と遠距離のバランスが取れた見事なものだった。

しかし、飛来する影の少女は人数が多い。

ほむらの銃撃をかくぐったひとり、杏子の背中に攻撃を仕掛けた時、それを受け止めたのはさやかだった。

「さやかー！」

影のさやかは言葉を発しない。

が、彼女だけは元の意識を取り戻しているのか、なんと杏子たちに加勢した。

ほむらはM249軽機関銃を打ち尽くすと、今度は89式小銃（ワルプルギスの夜で

使い魔相手に使った小銃）を取り出し、杏子の背中を守る。

機関銃よりも小型で軽量な小銃で、軽快に動き回りながら杏子をフォローした。

杏子は猛攻をしかける。

自分の後ろはほむらとさやかかが守っている。

その心強さに奮起し、あかねに反撃の隙を与えなかった。

『それじゃあ、天生目ゆう子。聞こえるかい？』

キュウベえはゆう子の魂に語りかけた。

あの時と同じように。

『本来なら絶対に叶うことがない、2つ目の願いだ。確かに君は、涼子のソウルジエムを

代用していた。だから今度は、本当に自分のソウルジエムを輝かせる番だ。〔今回はイ

レギュラーだから〕ね、仕方ない』

涼子がクスッと笑った。

『君は、どんな祈りでソウルジエムを輝かせるんだい？』

『

それは……そんな願いで、いいのかい？』

『

君がそれを望むなら構わないさ。だけど、その願いは……あまりに理不尽だと思っけ

』ど

『そうか。それもまた、大きな因果を紡ぐことになるだろうね』

『まったく、人間の感情というものにはいつも驚かされる。まあいいさ。その願いがどんな結末を迎えるか、見届けてあげよう』

キユウベえとゆう子の、魂の会話はこれで終わった。

あとは、魔法の使者であるインキユバーターの力で、ゆう子の魂の宝珠が輝く。

『ありがとう、キユウベえ。恩に着るよ』

『さすが、魔法の寵児である君の妹だ。この子の祈りは、大きな奇跡を生むかもしれないね』

そう言われてから、ゆう子はゆっくりと目を開けた。

今までと変わらず、赤紫色の燕尾服を着て、耳にはイヤリング型のソウルジェム。

カラーも、いでたちも、何もかもがさつきまでのゆう子のまま、魔法少女として戻ってきた。

ゆう子は後ろの暖かい身体に気付くと、優しく包む両腕を抱き

「お姉ちゃん」

とだけ言った。

ゆう子の目から、温かい涙がこぼれる。

泡沫の記憶を呼び覚まし、今ここに姉妹が再会した。

「さあ、ゆう子。お前の願いを実現させよう。キュウベえが叶えたのは、その祈りのきつかけだけだ。あとはお前の力が導くはずだよ」

「うん。任せて」

「私も力を貸すよ。お前の願い、私が同じ立場でも、同じ願いを告げるだろうからね」

ふたりは手を取り合うと、視線の先に螺旋あかねを見た。

ゆう子のソウルジェムが激しく輝き、無花果の大樹が大きく鼓動する。

「いいかい、ゆう子。まずはあの子たちを解き放つんだ。お前の目覚めた力は、魂の浄化。無理やり操られた彼女たちを還してあげよう」

「わかった」

涅槃の中心で、姉妹の力が重なる。

ふたつの魔力が相乗効果を起こし、無花果の樹は生命力に溢れた。

上空には魔法陣が敷かれ、それはまるで後光のように大樹を照らした。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編く再臨の物語く (第3部

18話)

無花果の大樹が後光に包まれると、影の少女たちに異変が起きた。

ほむらと杏子に向かっていった者、それを傍観していた者、そして影のさやかも、皆が突然動きを止めた。

「何が起こったんだ？」

その様子に、杏子も一旦槍を収める。

「あ、ソウルジェムが……い……」

影の少女たちの体内にあるジェムが、肉体から引き剥がれるように吸い出された。

ジェムを失った少女たちは音もなく塵のように消えていき、数百ものカラフルなソウルジェムが、すべて無花果の大樹に集められた。

魔法少女たちの魂の宝珠、それは命の結晶。

その結晶が、無花果の枝という枝に満ちていく。

小さな結晶は徐々に膨れ上がり、やがて豊かな無花果の実として実っていった。

あつという間に成熟した実は濃い紫色になり、大きさは1メートルほどに育ってい

た。

「魂の浄化……もしかして……」

ほむらは、無花果の実に宿る魔力を感じて気付いた。

数百の果実ひとつひとつから発せられるこの魔力は、もしや……

「ほむらさんー！」

大樹の中心から、ゆう子が叫んだ。

視線の先に螺旋良あかねを見つめ、最後の刻に向けて始まりの合図を送るように。

「みんなの力、ほむらさんに託します。あの人を、救ってあげてください」

みんなの力を託す。

あの人を救う。

ほむらは黙って頷いた。

ただその言葉だけで、ほむらは理解した。

そして、あかねも気付いていた。

これから起こることと、その結末を。

熟した無花果の実が、メリメリと音をたててひび割れる。

裂け目からは赤紫色の果実が見え始め、その中には、人の姿。

様々なカラーに身を包んだ、少女の姿。

美しく輝くソウルジェムを身に付けた魔法少女の姿が、ひとり、またひとりと、無花果の根元に降り立った。

胸元に緑色のジェムを付けた少女。

額に黄色のジェムを付けた少女。

空色のネックレスにジェムをはめた少女。

そして

青色に「C」を象ったジェムを付けた、美樹さやかも。

「さやかー」

青色のカラーを基調とした服装に、ブルーの髪の毛。

影ではない、本物の美樹さやかの姿を見た杏子が、パアッと明るい表情を見せた。

さやかはちよつとだけ片目をつむる仕草をしてから、他の少女たちと一緒にあかねを

見据えると、魔力を纏った。

他の魔法少女たちもまた、一斉に魔力の光を身体に帯び、辺りは魔法の力に満ちていった。

それはまるで、光のカーテンかオーロラのように涅槃の空間を明るく染める。

様々な色の魔力の光は、すべての色が相まって眩い白色に発光していた。

あかねが無理やり蘇らせた影の少女たちは、魂の浄化を受け、真の魔法少女としてあ

かねに相対した。

「どうやら、あなたの思惑とは違ったようね」

そう言ったのは、時の魔法少女、暁美ほむら。

ほむらの横には、幻惑の魔法少女、佐倉杏子。

ふたりの後ろには、顔も名前も知らない数百人の魔法少女と、ひと際大きく魔力を帯びた美樹さやか。

さらに後ろには、無花果の大樹からすべてを見下ろす、天生目ゆう子と涼子の姿。

そして、涅槃の空に浮かぶ星々もまた、自分たちの光を放っている。

すべての光は、ほむらに力を託している。

すべての魔力が、ほむらに集まっている。

一体、どれだけの魔力がほむらに集まっているのか。

世界も、星も、宇宙でさえも打ち消してしまうのではないかと思えるほどの力が今、ほむらの双肩にかかった。

ほむらは真つすぐに立ったまま静かに腕を持ち上げると、そこに漆黒の弓を出現させた。

「あなたの復讐は、あなただけのもの。あなた以外に誰も望んではいなかった」

「そうみたいだね」

暗い夜空を背景に、翼を片方だけ広げた白い悪魔、螺良あかねはそこに立っているだけだった。

相変わらず冷たい視線を向けてはいたが、殺気もなく、何をしようともせず、ただそこに立っているだけだった。

ほむらは右手に、淡くピンク色に発光する矢を取り出した。

これが最終局面、すべての魔力を滅する、終局の弓矢。

「あなたは最後に間違えてしまった。魔法少女は皆、生命を燃やして生きていた。安息の地に導かれても、希望の光を捨てていなかった。みんな、誰かの幸せを願っていた。それを……」

言いながら、ゆっくりと矢を番える。

「終わらせることは、誰にもできない」

ほむらの魔力、杏子の魔力、さやかか魔力、魔法少女たちの魔力。

すべてが終局の弓矢に集まり、ピンク色に発光する矢は大きな光の矢となった。

今までほむらが放ってきた魔力の数十倍、数百倍、いやもっと壮大で強大な魔力の矢。矢と呼ぶにはあまりに大きく、抱えきれないほどの光に溢れる巨大な大十字。

神々しい光がほむらの瞳に映った。

「あの子の祈りに感謝しなさい。きつとあなたにも、その意味がわかる日がくるわ」

それを聞いたあかねは何も言わず、フツと笑ったように見えた。

ほむらは光の矢を放つ。

漆黒の弓を離れた矢は、真つすぐにあかねに向かった。

巨大な大十字となった矢は、彗星のような尾を引いて一直線に飛び、あかねの身体を中心に捉える。

あかねは避けようとも防ごうともせず、ただその矢を見つめていた。

薄く開けた冷たい瞳に、矢の光が激しく映り込む。

「
」
そんな刹那、ほんの一瞬、あかねの口から漏れた言葉が、ほむらだけに微かに聞こえていた。

光の矢があかねの身体を貫く。

すべての魔法少女たちの魔力を乗せ、すべての魔力を打ち消す終局の矢は、誰よりも強大な魔力を持つあかねの肉体を一瞬で飲み込んだ。

矢の軌道に巻かれて、あかねの白い身体は形を失う。

そして矢の本体、先端の矢尻の部分があかねのソウルジエムを砕こうとした、その時終局の矢は。パーンという音と共に、光の粒となって飛び散った。

あまりに大きな魔力の飛散で辺りは真つ白になり、その場の全員が何も見えなくなっ

てしまった。

やがて視界が開けると、そこには小さなソウルジエムを両手に抱えた少女がいた。

「ほむらちゃん、待って」

「……!!」

白いドレスを着て、淡い羽根を広げ、ピンク色の長い髪を結び、優しくソウルジエムを抱える少女。

それは円環の理という概念でもない、絶望の魔女という禍々しいものでもない、世界改変の後に女神となった、鹿目まどかの姿があった。

「まどかー!」

涅槃の空間は、時が止まっているように静かだった。

その姿を目に映した瞬間、ほむらの瞳から大粒の涙が溢れた。

それは止めどなく流れ、頬を伝い、恥ずかしげもなく泣いた。

杏子もさやかも、他の魔法少女たちも、皆がひとつ違う次元にいるかのように霞んでいる。

「また会えたね、ほむらちゃん」

「ええ。あなたの言ったとおり、また……会えたわね」

涙に濡れ、震える声で、ほむらは答える。

まどかが微笑むと、ほむらも微笑んだ。

まどかは優しい笑顔で、ほむらは涙でくちやくちやになった笑顔で、お互いを見つめ合った。

「ほむらちゃん、この子も魔法少女なんだよ。誰よりも苦しんで、誰よりも悲しい想いを
して、それでも一生懸命に生きてきた、魔法少女なんだよ」

あかねのソウルジェムを、そっと抱えながらまどかは言った。

真つ白なジェムはひび割れたまま、持ち主を失っている。

「だから、もう許してあげてくれないかな」

「許す？」

「うん。この子の身体は、終局の矢でその存在を失くしてしまった。だからもう2度と、
この世に戻ることはできないの。でも、魂は生き続けることができる。ソウルジェムさ
えあれば」

魂は生き続けることができる……それはつまり、涅槃を照らす光として……ということ
とだろう。

鹿目まどかの、円環の理の導きによつてあかねの魂を救済し、安息の地で安らかに、と
いうことだろう。

しかし、ほむらは首を振った。

「まどか、それは……できない」

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

19話）

「まどか……あなたは優しすぎる。あなたはいつまで他人のために、自分を犠牲にしてしまうの？」

ほむらは声を振り絞って言った。

厳しい言葉をかける自分に憤りを感じるように、でもそれを言わなければならない自分を支えるように。

「あなたのその優しさで、救われた魔法少女がいる。あなたの願いで、安息の世界に導かれる魔法少女がいる。でも……あなたはどうかなの？」

「ううん、だってこれが私の願い。すべての魔女を産まれる前に消し去り、すべての魔法少女の絶望を打ち消す。それが私が叶えた願いなんだよ」

「そう、あなたはどこまでも崇高で、どこまでも畏敬する人。他人を想い、他人の幸せを願い、他人を救うために願いを叶えた。私も、何度もあなたに救われたわ。そして……」

——何度も絶望してしまった。

繰り返した時間軸の分だけ、ほむらは絶望した。

まどかの魔女化を止められなかった。

まどかが死ぬのを止められなかった。

まどかが世界を滅ぼす存在となってしまふことを……

止められなかった。

「ねえ、まどか。私の願い、あなたに言ったことがあつたかしら」

——あなたに守られる私じゃなくて、あなたを守る私になりたい

「結局、私の願いは叶わぬまま。あなたは神をも超え、その壮大な願いは宇宙の法則すら
改変し、概念となつてしまった。そして私の願いは、最後まで叶うことがなかった」

魔法少女の中で唯一、願いが成就されなかった少女。

祈りによつて時間操作魔法を得た〔だけ〕の、宙ぶらりんな魔法少女。

守られる側ではなく、守る側になりたいと願つたはずなのに。

「心配しないで、あなたを責めているわけではないの。私の繰り返した過ちのせいで、あ
なたは終局の願いに至つてしまったのだから」

ほむらは、何とも言えない目でまどかを見ていた。

女神のようなまどかの姿を。

いや、女神そのものの姿を。

ほむらが繰り返した時間の超越で、壮大な因果を紡ぎ、全宇宙と全時間軸を支配する

存在となつてしまった鹿目まどかの姿を。

「でも幸い、私の魔法は時間操作。すべての時空を過去に戻すことは難しいけれど、ある一点に集中してなら、時を遡ることができるとわ」

この無力な私の、時間魔法で――。

「まどか。そのソウルジェムは、すでに持ち主はいない。だから、その魂の宝珠にあなたの願いを吹き込み、新たな宿主として再びこの世に戻ることができるようよ」

「ほむらちゃん……」

「私はあなたの還りを待つていた。ずっとずっと、待つていた。あなたをこの世に呼び戻す魔法を生み出し、グリーンフィードの転生を成す刻を待つていた」

ほむらの考えたグリーンフィードの転生は、天生目ゆう子という実験で証明された。

ある一点に集中した時間遡行は見事に成功し、数か月間の時を戻して転生することができた。

「さあ、最後のグリーンフィードと八咫の盾、そして魔法の使者であるインキュベーターが揃つたわ。今こそ、再臨の時を始めましょう」

再臨、それは再びこの世に現れること。

神をも超え、女神となつた鹿目まどかをこの世に呼び戻すこと。

それが世界改変の後、ほむらがひたすら追い求めてきたエピソードだった。

しかし、

「ダメだよ、ほむらちゃん」

まどかは笑顔で、拒んだ。

「まどか！ ……どうして」

「私の魂を呼び戻したら、円環の理は消えてしまう。そうしたら、また魔法少女は魔女を産み、絶望の連鎖は繰り返されてしまうんだよ」

「でも……私はこれまで、そのために戦ってきた。立ち止まることも、諦めることもしなかった時間の連鎖は、この時のため」

「ありがとう、ほむらちゃん。私はね、ほむらちゃんのそんなところが好きだよ。ほむらちゃんは、いつだって私のために考えて、悩んで、導いてくれていたんだよね」

……けれど

「今の私の姿は、本当の私の姿じゃない。私は、限らない絶望を受け止めて、今はもう呪いの集合体でしかないの。みんなに見えているこの姿は、私の記憶が映すまぼろしなんだよ」

それは螺良あかねも言っていた。

——鹿目まどかは、数多の魔法少女たちの呪いを受け止めた、絶望の集合体

今の姿は、ほむらたちに見せている過去の記憶映像だと言う。

「今の私は、すべての呪いを受け止め、この世に戻さないように宇宙の外側を塞いでいる絶望の魔女。呪いが辿るのは円環の道だから、私がそれを受け止めることで決して人の世に戻ることはなくなっているの。だから、もし私がこの役目を放棄したら……」

「そんな……」

「だからね、私はこのままでいいの。これは私が望んだことだから、私の願いそのものだから」

「だけど、それじゃ……あなたが……あなたが救われない」

ほむらの声は悲痛に満ちた。

ほむらの願いは、まどかを守ることに同時に、まどかの幸せを願うこと。

これまでのすべての行動の、突き詰めた出口はそこだった。

しかし、まどかの選りばは円環の理の消滅を意味し、それはきつと、終末を意味する。

「彼女の言うことは、もっともだね」

と、これまで誰もふたりの会話に入り込まなかった中に言葉を挟んできたのは、キュウベえだった。

「なんですって？」

「彼女……鹿目まどかが担っている役割は、言わばこの世とあの世の橋渡しだ。この世の呪いを吸い上げ、魔法少女たちの魂を安息の世界に導く、ワームホールみたいなもの

だと考えればいい」

キュウベえは、これまでの話を完璧に理解している。

「この世とあの世は別次元だ。時空の違う世界への行き来は普通はあり得ない。だからこの世とあの世を結ぶには、時空のある一点から別の離れた一点へと直結するトンネルが必要になる」

ある一部分だけが接する、二重の円を想像すればいい。

と、キュウベえは付け加えた。

「中心円がこの世だとしたら、外円の外側があの世。その中間が、今僕たちがいる涅槃の世界にあたるわけだ。そして、円が接する部分には時空を繋げるトンネルがあり、それが円環の理ということだね」

あの世、それは安息の世界。

穢れの溢れた魔法少女や、魔力の尽きた魔法少女は魔女になることなく、魂は安息の世界に導かれる。

円環の理は、この世とあの世を結ぶ過程で少女たちの呪いを断ち切り、清浄な魂だけをあの世に運ぶ。

その役目を放棄するということは……まどかが抱える宇宙規模の呪い、この宇宙すべてを消滅させてしまうほどのエネルギーを、解き放つことになる。

「それと……」

「ここまでの話は、円環の理という概念の有無を問うものだが、もうひとつ大事なのは「君が目論むグリーンフシードの転生には、鹿目まどかの願いが必要だ。だけど彼女ももう、これ以上の願いは望んでいない。君や、他の魔法少女たちを救う以外の願いは持っていない。だから天生目ゆう子のように、もう一度……というのは無理だよ」

「それじゃ……」

ほむらは目を伏せ、唇を噛んだ。

「最後のグリーンフシードを手に入れたまではよかったけど、肝心の本人の意思がなければ成せない事だったね」

「まどか……」

「ほむらちゃん、ゴメンね。私の願いでほむらちゃんに悲しい想いをさせていたんだね。でも、ほむらちゃんにまた逢えて、本当に嬉しかったよ」

まどかの笑顔は、本当に嬉しそうだった。

誰にも干渉されず、ひとりで呪いを受け止め続けた歲月。

孤独と絶望だけが襲う時間のない時間の中で、概念としてだけ存在していた。

そんな中で、最高の友達との再会は何れほど嬉しいものか。

みんなの所に還りたい、そんな気持ちが微塵にもないとは言えない。

楽しかった日々も、憶えている。

もう一度、あの時に戻れたら……と考えないわけがない。

が、まどかはすべてを捨てて願った。

すべての魔法少女を救うため、願いを叶えた。

もう二度と戻らない覚悟を持って。

ほむらとまどか、ふたりの最後の出会いが終わろうとした時

「ちよつと待って」

その声は、さやかだった。

「ねえ、まどか。アンタの言ってることは正しいよ。確かにあたし達はアンタに救われたからね。魔女になることなく、魂を浄化してもらってさ。人として、魔法少女としての意識を失うことなくいられたんだと思う。でもさ……」

さやかはチラつと杏子を見て、それから周りの魔法少女たちも見回してから

「あたし達だつてみんな、アンタがそんな目に遭うなんて望んでいないよ」

と、優しい声で言った。

「さやかちゃん……」

「あたし達は、自分の意思で魔法少女になったんだ。そりゃ、誰かさんが黙ってたせいで、そのうち魔女になっちゃいますよなんて知らなかったけどさ」

横目でその誰かさんを見たのは、ちよつとしたイジワル。

キュウベえは無反応だったが、さやかは話を続けた。

「でもさ、みんな自分の願いを告げただよ。みんな、自分の願いを遂げただよ。少なからず、幸せな夢を見ることができたってのは、ホントの話」

杏子も、他の魔法少女たちも、さやかの言葉に反論はなかった。

願いを叶え、魔法少女となった代償はあまりに大きい。

こんな目に遭うなら……と、誰もが一度は考えたはず。

でも、「自分の力では絶対に起こせない奇跡と等価値」だったと思えば、誰もが一度は納得したのである。

「だからさ、まどかだけが背負い込むのはやめようよ」

「そうだけ」

杏子がすぐに続いた。

「そうよ」

他の少女も、続いた。

「そうね」

また違う少女も、続いた。

みな、口々にさやかの言葉に続いていった。

「みんな……」

「帰ってきなよ、まどか。アンタが受け止めた呪いがとんでもない量だつてんなら、あたし達みんなに戻してくれればいい。アンタだけに苦しい思いをさせて、あたし達はキレイなお星さまでいられるなんて、そんなの奇跡なんかじゃないよ」

「でも、円環の理が消えたら、みんなまた魔女になつちやうかもしれないんだよ？ そうした魔女は、みんなが退治しなきゃいけない。また絶望の連鎖が繰り返されちゃうんだよ？」

「そんなの、やってみなきゃわからないだろ？」

「杏子ちゃん」

「誰も好き好んで魔女になつちまうわけじゃないんだ。そりや、たまには絶望することもある。たまにはヤケになって、悪いことばかり考えてしまうこともある。だけどさ、あたし達はそうやって大人になっていくんじゃないかい？」

やがて魔女となる少女を、魔法少女と呼ぶ。

かつて、キュウベえは言っていた。

人間の少女が大人へと成長する生命（いのち）の摂理と同じく、ソウルジエムは成長段階の魔法少女の『生命』そのもの。

そして、やがてグリーンフィードへと成るのもまた『生命の摂理』

かつて、マミもそう言っていた。

誰もが当たり前として受け止めていた摂理も、もしかしたら変わるかもしれない。未来は誰にもわからないのだから。

「ねえ、やってみようよ。魔女になるだけがあたし達の未来じゃない。もう一度、みんなであって遊んでバカやって、時には助け合ってみようよ。その瞬間が、奇跡でも魔法でもない普通の瞬間が、一番大切なことなんだと思う」

一緒に登校して、話して、学んだ日々。

出掛けて、お茶して、買い物して、騒いだ日々。

笑って、泣いて、ケンカして、仲直りして、また一緒に過ごした日々。

まどかやさやかだけではない。

みんなにあった普通の日々が、それぞれの脳裏によぎった。

「それを教えてくれたのが、それを思い出させてくれたのが、まどかなんだよ」

まどかを見つめる少女たちは、みな同じ顔をしていた。

それは、さやかの言葉に、杏子の言葉に、みな同じ想いを抱いたからだった。

まどかの奇跡によって呪いと絶望を打ち消された少女たちは、もう誰も恨んでなんかいない。

もう誰も呪うことはない。

涅槃の星として世界を見つめ、まどかを見つめ、自分自身を見つめたきた。誰もがまどかに感謝し、いつか報いることができなにか、とも思っていた。

まどかが抱える呪いの量、宇宙をすべて滅ぼしかねない負の力も、みんなでちよつとずつ分け合えば受け止められるのではないか。

「ありがとう。みんな……みんなありがとう。私なんかのために、みんながそう言ってくれるなんて……」

「ほら、ここからはお前の仕事だろ、ほむら」

ニカつと笑う杏子にポンつと肩を押されて、ほむらは一步前へ出た。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部 20話）

「まどか……あなたが終局の願いを告げて、この世を去ったのはどれくらい前だったかしらね」

ほむらの憶えている時間で、半年前？

「だいたい、半年つてところかしら」

自分で、そう答えた。

「どうしたんだよ、ほむら。早くやりなよ」

後ろで杏子が急かしている。

ほむらがやろうとしているのは、グリーンフィードの転生を応用したまどかの再臨。

持ち主の消えたソウルジェムは、空っぽの魂の器。

そこにまどかの魂を宿し、再び魔法少女としてこの世に戻す……というのが、元々のほむらの狙いだった。

ヒビ割れた螺旋良あかねのソウルジェムは、まだグリーンフィードに成っていない。

魂の器という意味では同じなので、それはどちらでも構わないのだが、

「いいえ、何でもないわ。さあ、そのソウルジェムを私に」

と言って、まどかから白いソウルジェムを受け取った。

ジェムはヒビ割れ、その中からは漆黒が覗いて見える。

ほむらはそれを受け取ると

「ありがとう」

と小さく呟いた。

そして

「これで私が辿ってきた永遠の物語は、終わりを迎えるわ」

と言うと、白いジェムを指輪の形に変え、自分の右手中指にはめた。

「えっ？」

あの時、杏子も見ていたグリーンフシードの転生とは、何かが違う。

グリーンフシードに時間遡行の魔法をあて、時を遡り、魂を移し替えるのでは

「そうじゃないのか？ ほむら……お前、一体何を？」

「杏子、あなたはいつも強いわね。どんな逆境も諦めず、道を切り開く。あなたはやっぱり、誰よりも魔法少女に相応しい」

ほむらは何かを思うような目で、杏子を見ていた。

今まででないほど穏やかな眼差しで、優しく言葉をかけた。

「ほむらは何かを思うような目で、杏子を見ていた。今まででないほど穏やかな眼差しで、優しく言葉をかけた。」

「どうしたんだよ、らしくないじゃん」

杏子は少しはにかんだように表情を緩めて答えた。

「美樹さやか」

ほむらは振り返って、今度はさやかを見た。

「あなたの言葉がまどかに届いた。思い込みが激しくて不器用だけれど、行動力と勇気があるあなたは、彼女にとって必要な人」

「な、なによ転校生。そんなお別れみたいな言葉……」

確かにほむらの言葉は、まるで別れの挨拶のような、最後の言葉のような、そんなふうに聞こえた。

「まどか」

そしてほむらは再びまどかに向いた。

一步、また一步、足を進ませて近づき、そのまま両手を広げて、まどかに抱きついた。その手に、力いっぱい抱きしめた。

「ほむらちゃん？」

もう、涙はなかった。

記憶が映すまどかのまぼろしを抱きながら、その温もりを身体で感じながら、ほむらは魔力を開放した。

八咫の盾に魔法の力が伝わり、内部の歯車が回転する。

キーンという小さな音を立てて、歯車の回転が速度を上げる。

空間がゆがみ、時空に歪（ひずみ）が起こった。

「大丈夫よ、まどか。あなたが心配することは何もない」

ほむらの時間逆行魔法の発動。

ある一点に集中して時を遡る、天生目ゆう子を魔法少女にしたグリーンフィードの転生と同じ要領。

「あなたの受け止めた呪いは、もうどこへも行かない」

しかし、いま時空を超えているのはグリーンフィードでもない、ソウルジェムでもない。

ほむらの魔力は、まどかを包んでいた。

「すべての呪いは、私ひとりで引き受ける」

ほむらは両手でまどか手を握った。

ふたりの間で、胸と胸の前で、優しく指を絡ませた。

「ほむらちゃん、何を……？」

ほむらの左手の甲にあるソウルジェムが、みるみる黒ずんでいった。

これは、時の魔法を使うことによって穢れが増しているのではない。

ほむらの心が絶望で澱んでいるのではない。

「はっ！…もしかして…?!？」

ほむらは、まどかが抱えるすべての呪いを受け取っていた。

自らのソウルジエムに移し替えることで、まどかのソウルジエムを浄化していた。

まるで、グリーンフィールドで穢れを吸い出すように。

「やっと…やっとあなたの力になった。あなたに守られる私じゃなくて、あなたを守る私になれた」

「ダメ、ほむらちゃん！」

眩しい光が風のように舞い、ふたりを包む。

ほむらの魔法で遡った時間は、ちょうど半年。

それはまどかが終局の願いを告げる直前。

かつてワルプルギスの夜を前に、ほむらが力尽きようとしたその時まで、まどかの時間が遡った。

その姿は、絶望の魔女でもない、女神の姿でもない、ひとりの人間の少女。

まぼろしでもない、概念でもない、魔法少女でもない、元の鹿目まどかの姿。

出会った頃の、まどかの姿。

その姿を再び目にしたほむらは、これまでにない笑顔がこぼれていた。

「これでもう、あなたは魔法少女にも、魔女にもなることはない。もうひとつの約束も果

たせた」

鹿目まどかの再臨で、円環の理が消える。

世界を構築していた理（ことわり）が消滅する。

「あ、空が……！」

杏子が夜空を見上げると、無数に輝いていた星たちが一斉に降り注いでいった。

鹿目まどかの願いのもと、安息の導きを受けていた星たちは、その概念を失い、流星群となつてこの世に戻っていくのだった。

「綺麗……」

さやか目の目に、ゆう子の目に、涼子の目に、涅槃の空間に立つすべての魔法少女の目に、美しい星の雨が映った。

星たちは涅槃の足を越え、元の時代、元の場所、元の時空へと戻っていく。

呪いを浄化され、希望という輝きを放つ星々は、またどこかで祈り続ける。

もう二度と魔女にならぬよう、絶望の連鎖を繰り返さぬよう、少しづつ大人になつていくのかもしれない。

円環の理の終焉を見届けたほむらは、絡まる指をスルリと離した。

まどかの細い指と指の間から、ほむらの指がゆつくりとすり抜けていく。

「さあ、まどか。みんなのところへ」

そう言うほむらの左手は、小刻みに痙攣しているようだった。

星の雨は止み、あたりは薄暗い空間に包まれている。

ほむらは一歩、足を後ろに引いた。

「ほむらちゃん……もしかして、初めからそのつもりで……？」

まどかは一歩、足を前に出した。

「ええ、そうよ。円環の理が消えれば、魔女が産まれれないというルールも消える。そうでしょう？」

ほむらはまた一歩、足を後ろに引いた。

それは確かな足取りとはいえない、よろめくように、引きずるように。

ほむらの左手が、ビクンと大きく震えた。

「あなたはもう魔法少女ではない。私の魔法で、キュウベえと契約する直前まで戻っている。だからあなたは生身の人間」

まどかが身に付けているのは、見滝原中学の制服。

契約の直前、ワルプルギスの夜の襲来で避難していた時のまま、あの時のまま。

ほむらはさらに一歩、後ろにさがった。

それに釣られてまどかも足を踏み出そうとすると

「まどかー」

少し強い口調でほむらが静止する。

「物語はまだ終わっていないの。最後にあなたを傷付けたくない、だから……お願い」
「ダメ……待って、ほむらちゃん」

ソワソワつと、強風を受けているようにほむらの長い髪だけが大きくなびいた。

左手の痙攣が徐々に激しくなり、そこから黒い波紋が広がっていく。

杏子とさやかがその異変に気付いたのは、ほむらの左手が高く掲げられている時だった。

見えない何かに引つ張られるように左手が持ち上げられ、手の甲にあるソウルジェムが黒く輝く。

杏子もさやかも、思わず金縛りにあつたようにおののいた。

邪悪な気配というか、今まで感じたこともないくらいの魔力の波動が、他の魔法少女たちをも襲う。

「ひっ！」

「うわっ！」

力の弱い魔法少女は、その魔力の波動を感じただけで身体を硬直させ、頭を抱え、悪寒に震え、身動きも取れないほどに伏せてしまった。

「なんだ、この魔力は……？」

ビリビリと伝わる魔なる気に、杏子も身体が震える。

「ちよつと転校生？ これは何の冗談だったのよ」

さやかもそこに立っているのがやつと、といった感じで苦しい笑みを浮かべる。

生温かい風が足元に吹き始め、それはほむらの方に向かって流れていった。

透明な風はやがて色濃く、黒いつむじ風を形成し、ほむらの服をなびかせる。

ほむらの左手に揺れる魔力の波紋は、次第に強く、大きく、激しく、身体全体を覆い始めた。

「まどか、あなたに出会えて私、幸せだった。病弱で気弱な私が変われたのは、あなたのおかげだから」

「ほむらちゃん！」

まどかが手を伸ばし、ほむらに近づこうとすると、杏子が後ろから肩を掴んだ。

並みの魔法少女では動けなくなるほどの魔力の波動を浴びながら、まどかを止めた。

「まどか、近づいちゃダメだ」

「でも、ほむらちゃんが……ほむらちゃんが！」

目いっぱい涙を浮かべ、それでもほむらに手を伸ばそうとするまどかを、今度は横からさやかが止めた。

「お願い、杏子ちゃん、さやかちゃん！ ほむらちゃんを止めて！ ほむらちゃんのソウ

ルジエムは……」

「ああ。穢れが……溢れる」

ほむらのソウルジエムに、ピシピシと亀裂が走った。

細かい破片がこぼれ落ち、黒い揺らめきが舞う。

まどかの抱えていたすべての呪いを引き受けた魂の宝珠が、その穢れを開放する。

「まどか」

ほむらは左手のジエムから視線を移して、まどかを見た。

「ありがとう。そして……」

ほむらの目はとても安らかに、愛おしくまどかを見つめていた。

そして最後に、とても嬉しそうに微笑みながら言った。

——さよなら

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（第3部

21話）

パキーン

という音を立てて、ほむらのソウルジェムは砕けた。

魂の宝珠である紫色のソウルジェムが砕け散り、そこから産まれるのは、まどかの受け止めたすべての呪いを引き継ぐ、暁美ほむらという魔女。

「ほむらちゃん！ ほむらちゃん!!」

杏子の静止を振りほどこうとしながら叫ぶまどかの声は、もう届かなかった。

辺りは青と黒の結晶が広がってゆき、暗黒の空と涅槃の空間を包む。

激しい地響きが鳴り、壮絶な魔力の波動で空気までが振動していた。

「まぎゅいよ」

表情はいつもどおりのキュウベえだったが、声だけは珍しく慌てたように言った。

「あんな規模の呪いで魔女になるなんて、これは宇宙の法則を捻じ曲げるなんてレベルの話じゃない」

鹿目まどかが持っていたのは、現在、過去、未来、すべての魔法少女から剥ぎ取った、

呪いという名の負の力。

有史以前から続いた魔法少女の歴史で、存在していた魔法少女たちの、絶望という名の感情エネルギー。

円環の理となつたまどかの概念で、この世にもあの世にも存在しなかつたはずのものを

「たつたひとり魔法少女が受け取つてしまった」

魔女へと姿を変えたほむらは、黒いマントをバサつと広げ、みるみる立ち上がつていく。

その巨躯は、いわゆる魔女のような魔女の姿。

頭の上に乗せた黒い三角帽子を目深にかぶり、その脇からは漆黒の長い髪の毛が垂れ下がる。

毛先の方は大きく編み込まれたように束ねられており、まどかと初めて出会つた頃のほむらの姿を彷彿とさせた。

「暁美ほむら……君の行きつく終着点は、この世を見下ろす此岸（しがん）の魔女だったのか」

「此岸の……魔女」

見上げる杏子の目にも、さやかな目にも、この魔女の存在がさつきまでのほむらの姿

が豹変したものだと思われ、疑う余地はなかった。

曉美ほむらの、変わり果てた姿。

禍々しく、恐ろしく、そしてどこか悲しげな雰囲気の特徴的だった。

「ほむらちゃん、どうして……どうしてこんなことを……」

まどかは涙をポタポタと流しながら悲痛な言葉を発した。

唯一、魔法少女ではないまどかには、此岸の魔女が発する魔力の波動はわからない。

まどかが感じているのは、自分を救うために自分を犠牲にしたほむらの優しさだった。

が、他の魔法少女たちはそうはいかない。

此岸の魔女は、この世のすべての呪いを魔力に変えた魔女。

その魔力は、先のキュウベエの言葉を借りるならば、宇宙規模の魔力を有している。

ワルプルギスの夜も、螺旋くるみも、螺旋あかねも、その足元に遠く及ばない。

まさに絶対的に、圧倒的に君臨していた。

その魔女が目の前に存在しているだけで、魔力の弱い魔法少女たちは金縛りにあったように動けず、震え、背筋が凍り付く。

ある者は呆然と涙を流し、ある者は恐ろしさのあまり身体が硬直し、またある者はその魔力の強さに意識を失ってしまいそうなほどの力。

そして杏子も同じだった。

「くっ！ 恐怖で……身体が動かない……！」

足が震え、立っているのがやつとといった感じで、口を歪めながら杏子は怯えていた。さやかもまた、その場にひざまずき、動けずにいた。

此岸の魔女は巨大な躯体を動かし、まどかに向かつて左手を伸ばした。

真つ黒な腕が、まどかを掴む。

杏子もさやかも、他の誰も、その動きを邪魔することはできなかつた。

いや、もし手を出そうものなら、一瞬で消されてしまいそうな恐怖で動けなかつた。まるで小さな人形を抱えるように、此岸の魔女がまどかを掴んだ。

優しく、柔らかく。

頭と両手両足の先がはみ出ているだけで、身体のひとつがその手の中に握られていく。

握り潰そうとしてるわけではないのは、まどか本人が一番よくわかつた。

此岸の魔女は、もう片方の腕を空に向けると、人差し指を伸ばし、スツと空をなぞつた。

指先で夜空を斬るように、ゆっくりと。

指先の軌跡に沿って、白い筋が夜空に描かれる。

と、次の瞬間。

物凄い爆風が吹き荒れ、涅槃に立つ魔法少女たちを襲った。

此岸の魔女は、夜空の空間を斬っていた。

その烈風というか、太刀風というか、たった一本の指先に魔力を込めて空間を斬った威力が、まさにこの世の終わりと言わんばかりの暴風を巻き起こしたのだった。

「みんな、あの樹に掴まるんだ！」

激しい風に吹き飛ばされそうになる魔法少女たちに向かって、杏子が叫んだ。

雄大にそびえる無花果の樹は、巻き起こる暴風に大きく揺れていたが、吹き飛ばされることなく太い根と強靱な幹で耐えている。

みな恐怖でおののく身体を必死で駆りたて走り寄ると、しがみつくように大樹を抱いた。

やがて吹き荒れた暴風はおさまり、窮地を脱したかのように思えたが、今度はさつきと真逆の風が吹き出した。

「あれは……空間を斬ったというより、時空が裂けたのか？」

辛うじてその場に立ち残った杏子は、裂けた空間がすべてを吸い込もうとしている様を見て言った。

「信じられない。魔力で時空を裂くなんて……」

指先ひとつで時空を裂いた此岸の魔法の魔力を目の当たりにし、キュウベえも驚愕していた。

空間の切れ目、時空の裂け目、それはつまり、ブラックホールのようなものだった。どこへ通じているのか、あの先に何があるのか、誰にもわからない。

そんな裂け目が、此岸の魔法の上に大きく口を開けていた。

「それより、まどかは何?」

遠目で探さずやかの目に、此岸の魔法が掴んでいるまどかが見えた。

あの爆風も、魔法の手の中にいたから無事だった、とも思える。

時空の裂け目が吸い込もうとする力は次第に強くなり、無花果の大樹に掴まる魔法少女たちも必死で身体を支えている。

杏子はまだ地に足をつけて耐えているが、吸い込む力が増してくるにつれてジリジリと引き寄せられていった。

「おい、キュウベえ! ほむらは魔法になっちゃった……そうなんだな」

杏子は赤い槍をガキンと地面に立て、それを支えにふんばりをきかせた。

「確かに曉美ほむらは魔法になってしまった。けれど、あれはもう魔法と呼ぶことすら

おこがまし〜」

「ど、ど、どという意味だよ」

「あれは、まどかが抱えていた呪いを受け取った、円環の理と同等の者。円環の理と対を成す者。つまり、神をも超える存在だよ。あんな魔力、君たちがどう抗ってもどうにかなるものじゃない」

「じゃあ、アイツを救うことはできないってのか？」

「救う？ 何を言っているんだい？ 彼女はもう救われているんだよ。彼女の心はすでに満たされているんだ。自らの願いを遂げて、自らの終着点に辿り着いた。今の姿がどうあれ、あれが彼女の到達点なんだ」

いくつもの時を彷徨い、ようやく辿り着いた安息の刻。

ようやく願いを遂げ、まどかを救い、まどかを抱きしめた。

すでにほむらは人としての意識は失っているだろうが、その心は此岸で安らぎを得ているのだろう。

と、キュウベえは思った。

「ただ、あの魔力はどこにも行き処がない。存在しているだけで世界を壊滅させてしまうほどだ。今はまだ、この涅槃の空間にとどまっているからいいとして、これが君たちの星に降り立てば一瞬で何もかもを壊してしまうだろう」

神をも超える存在を、止める手立てはない。

人も、魔法少女も、科学も、文明も、どんな力をもってしても抗うことすらできない。

暁美ほむらという最期の神が

人と、魔法少女と、科学と、文明をすべて消し去るだろう。

キュウベえは。パチリとまばたきをしてから、無表情のままに杏子を見て言った。

「世界は、終わる」

「な……っ！」

キュウベえの話は、さやかに、他の魔法少女たちにも、そして天生目ゆう子と涼子にも聞こえていた。

誰もが言葉を失った。

そして誰もが、終わりの始まりを告げるような時空の裂け目をだた見つめていた。

此岸の魔女が切り裂いた時空の切れ目は、ひたすらにすべてを飲み込もうとしていた。

続く

魔法少女まどか☆マギカ 別編～再臨の物語～（最終話）

「なんてこった。こんな終わり方ってありかよ」

杏子が見上げる時空の裂け目は、いよいよ威力を増し、何もかもを吸い込もうとしている。

此岸の魔女という絶対の存在を前に、誰も何もできない。

片手にまどかを抱んだまま、平然と、悠然と君臨している姿に、抗うことはできない。

「ほむらちゃん……これがあなたの望んだ結末なの？ これがあなたの願いななの？」

まどかは、此岸の魔女を見つめて言った。

もしこのまま此岸の魔女が手を離せば、まどかはたちまち時空の裂け目に吸い込まれてしまうだろう。

いや、まどかだけではない。

杏子もさやかも、他の魔法少女たちも、いずれ力尽きてあの暗闇に堕ちていく。

それは火を見るよりも明らかだった。

此岸の魔女は帽子を目深にかぶっているのか、顔が見えない。

何を見ているのか、何を考えているのか、何をしようとしているのか、それはまどか

にも分からなかった。

「もう、戻れないの？」

一度魔女になってしまえば、もう戻る術はない。

分かっているても、口にはいれられなかった。

「もう、一緒に過ごすことはできないの？」

魔女には、言葉など届かない。

世界を、宇宙を滅ぼしえる存在となってしまうたほむらには、まどかの言葉は届かない。

「お願い、ほむらちゃん……戻ってきて。もう一度、あなたに逢いたい。もう一度、あなたとの時間をやり直したい。もう一度……ほむらちゃんの顔が見たい！」

まどかの目には涙が溢れていた。

悲しみが心の痛みのように走り抜け、それでもどうすることもできない自分に憤りを覚えながら、声を枯らして叫んだ。

「ねえ、キュウベえ！ 私、魔法少女になる！ だから願いを叶えてよ!! ほむらちゃんを元に戻して！ ほむらちゃんを助けて！ ほむらちゃんに逢わせてよ！」

「バ、バカなことを言ってるじゃねえ！ それじゃ何も変わらないじゃないか！」

「杏子の言うとおりで。君が、君自身の魂をソウルジエムに変えたとしたら、また同じこ

との繰り返しだよ」

「でも、それじゃほむらちゃんが……みんなが……」

その時まどかの目に、いや、まどかの脳裏に、ほむらの笑顔が見えた……ような気がした。

それは此岸の魔女などという禍々しいものではなく、確かに暁美ほむらの、暖かい笑顔が見えた気がした。

まぼろしか、記憶の欠片か、ほんの一瞬だけの出来事。

「ほむら……ちゃん……？」

此岸の魔女はまどかを掴んだ左手をゆっくりと下ろし、まどかの足が地に付くところに止めた。

見上げるまどかと、魔女の顔が向き合う。

目深にかぶった三角帽子の中に、魔女の目が垣間見えた。

その目は、まるで暁美ほむらの目そのもの。

まぼろしではないほむらの目が、優しい眼差しを向けていた。

「おい、まさか……そんなところにまどかを降ろすつもりか!？」

突き刺した槍にしがみつきのながら耐えている杏子のすぐ先で、此岸の魔女は手を離そうとしている。

あんなところに放り出されては、すぐに時空の裂け目に吸い込まれてしまう。

杏子は咄嗟に魔力を開放し、赤い菱形の文様をいくつも繋げた魔法の結界を生み出し、それを長くつなげて一本の鎖のように伸ばした。

そして結界の鎖をまどかの腕に絡ませると、そのタイミングを計っていたかのように此岸の魔女は手を離す。

「ほむらちゃん……何を？」

次の瞬間

此岸の魔女はフワッと浮き上がったかと思うと、巨大な身体が舞うように時空の裂け目に吸い寄せられた。

裂け目は、真つ暗な口を開けて此岸の魔女をその中へといざなう。

人も、星も、光も、何もかもを飲み込んでしまいそうな闇の入り口に、暁美ほむらは小さく消えていった。

まどかは叫びながら手を伸ばし、その姿を追いかけようとするが、反対側の腕は結界の鎖でつながれている。

手は届かなかった。

声も届かなかった。

此岸の魔女が、すべてを飲み込む闇の中へと消えていくのを、ただ目で追いかけるだ

けだった。

やがて時空の切れ目は、静かにその口を閉ざしていく。

吹き荒れる嵐は止み、風も時間も言葉も消えたような静寂が涅槃の空間を支配した。

「ほむらちゃん、どうして……どうして……」

まどかも杏子も、さやかも他の魔法少女たちも、みな無事だった。

誰一人として、此岸の魔女に傷付けられることもなく、時空の裂け目に飲み込まれることなく、今は静かに空を見上げていた。

「アイツは、自分の意思で決着をつけたんだな」

「杏子ちゃん？」

「まどかを呼び戻すことも、すべての呪いを断ち切ることも、そして最後に自分の行く末も、見越していたのかも知れない」

杏子は突き刺さった槍を引っこ抜くと、それを肩に背負ってから辺りを見回した。

「みんな、助かった。誰も犠牲にならなかった。アイツのおかげでな」

「でも、こんなのおかしいよ。ほむらちゃんが、ほむらちゃんだけが消えてしまうなんて……」

まどかは顔を伏せ、掌で口を覆いながら、嗚咽を漏らした。

ポタポタと涙が垂れ落ち、足元を濡らす。

かつてほむらの部屋だった白い床に、悲しみの雫が広がった。

「そうだな。アイツだけが犠牲になるなんて、あたしだって納得いかないさ。本当は、誰もが幸せなハッピーエンドじゃなきゃいけなかった。正直……悔しいよ」

そう言つて杏子は目を閉じた。

これまでずっとほむらと行動を共にしてきたからこそ、杏子もハッピーエンドを目指していたはずだった。

「でもアイツは選んだ。まどかを生かし、その因果を自分で背負うこと選んだ。まどかの幸せが自分の幸せだと確信したからこそ、この結末を選べたんだ」

「もう、逢えないんだね……」

「はは、そんなことはないさ。見なよ」

振り返つた杏子たちの後ろには、美樹さやか、天生目ゆう子、涼子、そして他の魔法少女たちがふたりを見ていた。

「あんたもあたしも、ここにいるみんなが、ほむらが生きていた証さ。みんなの中に、ほむらは生きている。みんながほむらを想つて、これから生きていく。そうじゃないかい？」

「……うん」

「これから大人になって、泣いて、笑つて、恋をして、ずっと生きていく中で、ほむらも

一緒に生きていく。誰もあいつを忘れてたりしない。あたしたちは、いつもどこかで心が繋がってるんだ」

だから……

「また逢えるんじゃないかな。……そうだろうか？ キュウベえ」

思いがけず言葉を振られたキュウベえは、白い耳をヒョコつと動かせた。

「君たち人間の感情というものには、いつも驚かされる。人の死に感情を動かし、人の生に想いを馳せる。心の中に人が生きるなんて、僕たちの思考にはないからね」

「ちえつ、相変わらず面白くないやつだなあ」

「でも……そういう思考を持つことは、少し羨ましいのかもしれないな。ところで、まどか」

赤い目をパチリとしてから、キュウベえ歩き出した。

小さな四肢を繰り出しながら、ヒョコヒョコとまどかのところに来ると

「僕の役目はここまでにしておくよ。特に君は、僕たちの制御できる範疇を超えていた。危うく、この宇宙そのものを消滅させてしまうところだった」

それは、暁美ほむらによる時間の連鎖が原因ではあったけれど……と、キュウベえは付け加えて

「君にしても、暁美ほむらにしても、これ以上人間の感情に関わり過ぎるのは危険だと分

かった。だから、お別れを言うよ」

惜別の言葉とは思えないほど、あっさりと、淡々と言った。

「どこかに行つちやうの?」

ようやく落ち着きを取り戻したまどかは、少し驚いたように答えた。

「もう君たちに関わるのは止めておくよ。僕たちの本来の目的も大事だけど、それ以上にリスクが大きすぎた。それに……ひとつ、やらなければならぬこともある」

「やらなければならぬこと?」

「そうさ。物語の終幕は、まだ済んでいないからね」

そう言つてキュウベえは、涅槃の空を見上げた。

輝く星たちはすべて地上へと落ち、今はただ暗闇でしかない空を見上げていた。

「またいつもの、詳しい事は内緒です、つてやつか」

キュウベえの相変わらずな物言いに杏子は辟易とするも、それは慣れたものだった。

「君たちは、君たちの世界に帰るといい。天生目ゆう子の能力があれば、みんな元の世界に戻るはずだよ。ここにいる少女たちは皆、君たちと同じ世界の住人だ」

流星となつて落ちた少女たちも、それぞれ自分の世界に戻っているはずだ、とも言つた。

魔法少女たちは、これからも戦わなければならない。

誰にも見えない、誰にも触れられない、誰にも干渉されない世界。

そこでただひとり、彼岸に拠る少女の前にインキュベーターは現れた。

「まさか自らの意思で決着をつけるとはね。驚いたよ」

「……」

「まどかの受け止めた呪いを、そんなふう処理するなんて。よくも考え付いたものだ」

「……」

「人間の感情が成せる、究極の所業とでもいうのかな。僕たちには決して理解できない

ことだ」

「……」

「君の描いた物語は、おおむね筋書きどおりだった。そういうことだろうか？」

「……ええ」

「天生目ゆう子の祈りは、想定外だったけどね」

「……」

「ところで……君は自分がどういう存在なのか、理解しているのかい？」

「……」

「君はすでに、神をも超えている。君の抱える力は、あまりに強すぎる。これがどういう

意味かわかるかい？」

「…………ええ」

「これだけ膨大な因果、強すぎる感情エネルギーは、この世の理を、宇宙の法則を乱すだけじゃない。この宇宙のすべての生命体を滅ぼしかねない。そんな存在が彼岸から見下ろしているなんて、僕たちのテクノロジーをも根底から覆すほどだよ」

「…………その根底、壊してみせましょうか」

「それは…………君が望むなら、ね」

「…………いいえ、嘘よ」

「そうか。なら、君と取引をしたいんだ」

「…………」

「これまでの君のすべてを無為にしてもう一度、自分の世界に戻るつもりはないかい？」

「…………どういう、意味かしら」

「物語の終幕は、まだ済んでいない。君の描いたエピローグに、僕たちが少しだけ干渉したいってことさ」

「…………」

「このままエンドロールを迎えるよりは、君にとっても望むべきことだと思うけど」

「…………」

「お互い、有益な話じゃないかい？」

「……そうね。で、どうすればいいのかしら」

「最後のソウルジェムを使うといい。君にしかできない、グリーンシードの転生を当てるんだ」

「……」

「君は最後まで、螺良あかねのソウルジェムを使わなかった。今も右指に付けたままなんだろう?」

「……ええ」

「まったく、不思議な因果だね。そのジェムは僕たちを滅ぼそうと企み、また今でも僕たちを滅ぼしえる」

「……」

「そのソウルジェムに、君の魂を宿すんだ。君の力なら、造作もないことだろうか?」

「……そうね」

「そうして、君の世界に再臨するといい。君の還りを待っている子たちのもとに」

「……どうして、そんなことをさせるの?」

「言っただろう? 今の君の存在は、僕たちにとって脅威でしかない。いや、僕たちだけじゃない。この宇宙のすべての生命を脅かす存在だ」

「……」

「僕たちの存在意義と、君の存在理由、どちらにも折り合いがつかうと思わないかい？」

「……そうね」

「ただし、代価は必要だ」

「……」

「すべてを忘れるそのソウルジェムで、過去の記憶も、まどかへの想いも、すべてを忘れて再臨するといい。それが君が受け入れるべき条件だ」

「……つり合いが取れてないわね」

「これでもかなり譲歩しているつもりだけどね。君がその力で世界を滅ぼそうというのなら、止めはしないよ」

「……いいえ、飲むわ」

「そうか。やっぱり君は話の分かる魔法少女だね」

「……魔法少女、ね」

「それから、もうひとつ。すべての記憶を忘却の彼方に消し去ることになっても、命の記憶だけは残されるはずだよ」

「……あら、あなたらしくない発言ね。論理的でも合理的でもない」

「そうかもしれないね。まあ、いづれ分かるよ」

「……そう。それじゃ、私からもひとつお願いがあるのだけれど」

「ひとみく、ダメだよまどかをかばっちゃ。あたしたちはずっと待ってたんだから」
「あら、でもほんの数分ですわ」

さやかは、アハハ、そうだったっけ？ と嬉しそうに頭を掻いた。

この場でまどかを待っていたのは、ほんの数分。

短いようで長い時間。

「お、今日もかわいいリボン！ やっぱりモテを気にする女子は、身だしなみから違いますな」

「さやかちゃん、やめてよ。それ、前にも聞いた気がするよ」

「あれ、そうだったっけ？」

3人の笑い声が、柔らかな風に乗っていった。

何事もない日常。

ごく普通の、ありふれた朝。

学校に向かう少女が3人。

「あら、杏子さんじゃありませんの？ おはようございます」

並んで歩く3人を追いかけて、杏子が走ってきた。

みんなと同じ見滝原中学の制服を着て、カバンを肩にかけ、タカタカと走ってきた。

「あつぷねー、遅刻するところだったよ」

「杏子ちゃん、おはよう」

「なぐにやつてんのよ杏子。ほら、リボンが曲がつてるじゃない」

胸元の赤いリボンは、見滝原中学生徒とひと目でわかる大きな特徴だった。

雑な結び目で適当に留められたリボンを、さやかが渋々と直す。

「いや、悪い悪い。今日くらいは遅刻しちやマズいかなあと思つてさ、慌てちやつた

よ」

「今日くらいいつて、毎日ちゃんと行きなさいよね」

まどかやさやかがこの世に戻り、今日は初めての登校。

いつぶりの登校だろうと、まどかは思った。

いや、そんなことはあまり気にしない。

奇跡でも魔法でもない普通の瞬間がここにある、と感じていた。

「急ぎましょう。早くしないと、本当に遅刻してしまいますわ」

じやれ合うさやかと杏子を見て、ひとみが優しく諭した。

校門を抜けて校舎へ向かう途中で上級生の女生徒とすれ違つと、ひとみは軽く会釈を

した。

釣られてまどかたちも頭を下げる。

「あら。みんな、おはよう」

「おはようございます」

すれ違いざまに目と目を合わせると、女生徒はニコつと笑い、まどかやさやかもニコつと笑った。

言葉は交わさなかった。

ただ、杏子だけはその場で立ち止まると

「よっ！」

と言いながら、女生徒に何かを手渡す。

「ありがとう」

と言って女生徒はそれを受け取ると、そのまま別の校舎の方へ歩いていった。

「どうしたの？ 杏子ちゃん」

まどかは、すぐに追いついてきた杏子に何をしたのか尋ねる。

「いや、別に。預かり物を返しただけだよ」

杏子はそう答えてから、後ろを振り返った。

少し離れた所で立ち止まった女生徒は、杏子から受け取ったもので右側の髪の毛を留め直すと、またすぐに歩き出した。

朝のホームルームは、いつも早乙女先生の他愛もない話から始まる。

やれ目玉焼きは固焼きか半熟かとか、やれ結婚はどうだとか、まあとにかく授業や学校とは関係のない話を喜怒哀楽たっぷり熱弁するのだが

「みなさん、今朝は先生のお話はお休みして……」

どうやら、今日はそれは無いようだった。

代わりに廊下のほうをチラッと見てから

「今日はみなさんに大事なお話があります」

と、なぜか嬉しそうに、ちよつとだけ誇らしげに、クラスの中を見渡した。

先生のお話はお休みだけど、大事なお話？

皆が首を傾げてしまうのを見届けてから、早乙女先生は続けた。

「実は……転校生を紹介したいと思えます！」

左手を廊下の方へ差し出し、それではどうぞ！　と言いたげに皆の視線を集めた。

転校生？　今時？　誰か入ってくるのか？

そんな空気を作り出した先生は

「うふ、新しい生徒が来るなんて、こつちまで緊張しちゃうわね」

ひとり言を口走りながら、まるで自分が転校生にでもなったかのように、モジモジし始めた。

しかし、教室の扉は開かない。

しかも、先生は見えていない。

「そういえば、私のクラスに転校生って多い気がするわねえ」

まだ、扉は開かない。

が、くもりガラスの向こうには人影が映っていた。

「少し前に佐倉さん、その前にも誰か転校生を迎えたような……いやいや、そんなわけないわよね。気のせい気のせい……って、あら？」

結局、扉は開かなかった。

やっとそれに気付いた先生は、教壇からそくつと扉のほうへ行くと

「もう入ってもいいのよ」

と言ってゆつくりと扉を開いた。

そこには、両手でカバンを持ち、顔を伏せている少女がひとり。

「じゃ、こちらへいらっしやい」

早乙女先生に手を引かれて教壇の横に歩いてきたのは、長い黒髪のおさげで、赤縁のメガネをかけた大人しそうな少女だった。

いかにも気弱そうな少女が、先生と並んで教壇に立つ。

まどかもさやかも杏子も、じつとその姿を見つめていた。

「え……？」

じつと見つめてから、口を開けて固まっていた。

「はい、それじゃあ自己紹介いつてみよう」

先生は意気揚々と自己紹介を促し、ニコニコしながら少女の肩をポンと叩いた。クラスの皆に注目され、少女は顔を真っ赤にして目を泳がせ

「あ、あの……」

蚊の鳴くような、かすかで弱々しい言葉を口にした少女は、それでも精一杯の声を張り上げて

「暁美……ほむら、です」

と名乗った。

その瞬間、ガタガタつと席を立って教壇に駆け寄る生徒がひとり。

「あらあら!? 鹿目さん? 一体どうしちゃった……」

赤いリボンが揺れて、その横を小さな涙の雫が舞う。

そうして教壇の机から上半身を乗り出し、暁美ほむらに力いっぱい抱きついた。

嬉しくて、涙がポロポロと溢れて、それでもやっぱり嬉しくて、笑顔が止まらなかった。

暁美ほむらは、何が起こっているのかわからないといった感じで困惑していた。

どこか懐かしくて温かい感触が、思い出せそうで思い出せない。

でも、何か憶えているような、夢の中で逢ったような、それは命の記憶にあるような、そんな気がした。

まどかは、涙でぐちゃぐちゃに濡れた頬をよせて、ようやく言葉を見つけた。

「おかえり、ほむらちゃん」

ほむらの右指にはまる指輪からは、純白の光がこぼれていた。

完